

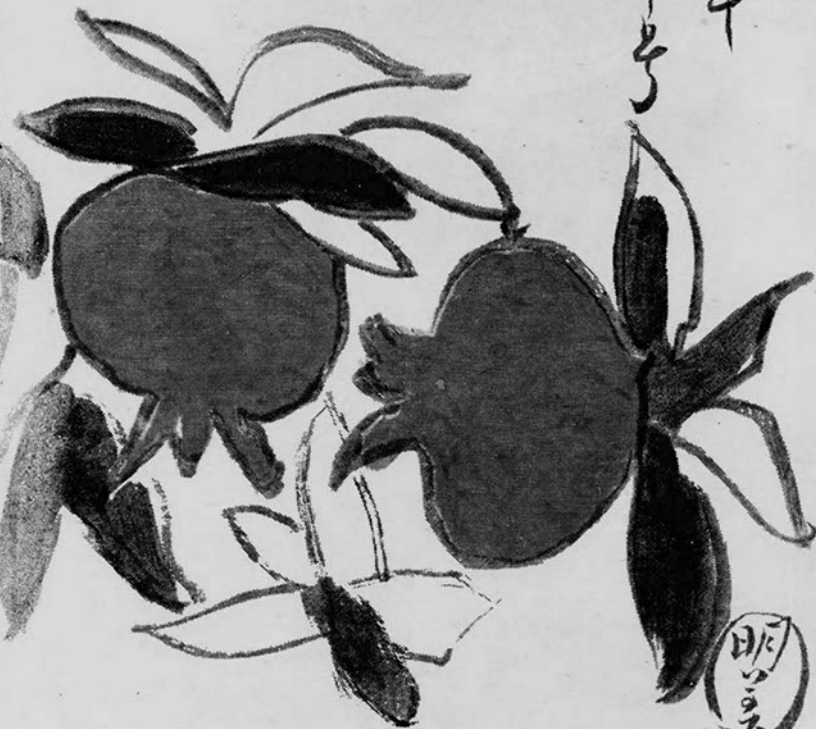
贈呈

花(和丹)

昭和四年
四月二十日

マチスと十和田湖
彫らない碑文
スケッチ・ブックの人氣

富澤有為男
八木東作
中柴光泰



磐城女子高等學校



花の会

創立四十週年記念號
(第六號)

通産大臣賞再度受賞
輸出特級規格
文部大臣指定

リズムミシン
福助ミシン
プリモミシン
スクラムミシン
シルバーミシン

現金・月賦販賣

平市三丁目四一(平和通り)

特約代理店 三浦ミシン商會

電話(平)八六四・九〇七

＝創業30年の傳統を誇る＝

◁ 技術と信用のスタジオ ▷

磐城高女生に限り

特…別…サ…ー…ビ…ス

受験用寫眞は三日間調製

平市並木通り

三光館スタジオ

電話 1,124 番

『あかる』 創立四十周年記念號 (第六號)

— 目 次 —

『あかる』に寄せて

大橋 秀 冬 1

生活の斷片

允

津

田

ト

子 2

回想日記

粟

屋

千

鶴

子 25

詩

喜

古

川

セ

ツ

子 15

心 詩 合

千

大

純

草 19

彫らない碑文

八

木

東

作 8

スケッチ・ブックの人氣

中

柴

光

泰 20

短歌

愁

壽

ど

子 24

十和田湖

中

西

一

路 46

創作

しやぼん玉に寄せて

木

崎

の

美 4

すねたお坊ちやんに

奥

木

馨 18

旅の日は

八

木

佐

和 36

おはぎ

子

子

誠 47

氣違いの部屋

高

井

誠 47

寂寥

誠 47

子 39

子 27

子 36

詩

秋 空

照

の

子 34

白雲への斷想

こ

西

美 34

落陽の美

中

西

路 35

俳句

旅 秋

中

島

秀 33

初 夏

壽

子

子 41

夏の十和田湖

中

西

路 41

夕暮

杉

一

子 41

マチスと十和田湖

富澤有爲男 45

表

紙

鈴

木

明

美

思 考

バスカル

考えを書きしっていると、その考えが折々にけてしまう事がある、がこのことのおかげで私は、私のいつも忘れていた所の私というものの頼りなさを思い出す事が出来る。これは私の思い出すことの出来なくなつた考えと同じように、私にとつて教訓的である。なぜなら私はたゞもう私というものの空虚さを知ろうとのみ思つてゐるのである。

『バンセ』より

あかゐに寄せて

大 橋 秀 冬

國民の待望久しかつた講和の調印もめでたくすんだこの年に本校創立四十周年を迎えることは何という意義深いことでしょうか。

多彩な行事も日ならず展開されるでしょうし、學校、同窓會と三者一体となつて結實した生徒生活寮も近く完成する運びとなつております。

記念事業にふさわしい内容を盛つたこの設備は、生徒諸姉にとつてこゝで生活することが如何に有意義であり、どんなにか楽しいそしてなつかしい思い出になることだろうと今から推測されます。又そうあるように運営しなければならぬと種々構想を練つております。それにしても生徒諸姉の理解ある協力こそ何にもまして要望されるのであります。

本校文藝雑誌「あかゐ」も種々苦難な道を辿つて來ましたが、編輯に当られた方々の適切な経営と、誌友の人々の協力によつて益々發展の途上にあることは誠に欣快に堪えません。茲に關係者諸姉に對し敬意と感謝の辭を捧げます。

然し、本誌にしてもまだ〳〵未完成であります。未完成の征服こそ人類の希望であり、その希望があればこそ勇氣と智慧とが湧いてくるものです。富を求めるのも、道を求めて生きるのも、その限界が見えないところに魅力があるものです。その段階を一步一步のぼつて行くのが人生です。本誌は千里の道を行くのに、まだ漸く一步を踏み出したばかりです。求めるものは無限であります。

勇氣と希望とをもつていばらの道を切り開き、輝かしい傳統を誇る本校と共に永久に發展されることを熱望します。

生活の斷片

允 子

高校のグラウンドの芝生に、かげろうが、古い追憶の様にゆれている。「五組の緒方さんわかる？ねえ、尾崎さん」友ちやんをふせて安井が聞いた。「ええ、分るわ、すばらしい美人。」リーダーを見ながら、尾崎は答えた。「すごいでしょう、彼女。」「うん。」「あの人、めつたに制服着ないわね。」安井はおしやれである。人の服装には多大の關心を持つて觀察している。尾崎の性質とは反對に、はで好きである、しかし、彼女は、尾崎の、しつとりおちついた静かな態度に一目おいてゐる。高校へ入學して次の日席が定つた。尾崎のわきが安井だつた。二人は、七クラスの中では一番親しくしている。今日も晝休のグラウンドで、こんな會話を始めたところだつた。

「あの方、とても頭も、いゝんですつて、でも、何でも熱心にやらないんだつて。」「うん。」尾崎は安井の話は、うわの空である。尾崎には、緒方さんとか美人で、すばらしい頭腦の持主であるなど、云うことはどうでもいゝことであつた。中學校に居た時も、成績の悪い生徒達をよくこんな風に他人の顔、スタイル、服装などを批評して、けなしたり、うらやましがつたりして居たものだつた、今はもちろん、尾崎も、その中に入つて話して居る

のだから、他人のことは何とも云えないが……安井のおしやべりに尾崎はある一種の淋しさと、一種の安心さを感じた、（みんな、もつと、上品で、出来ると思つたのに……）しかし教室へ、集つた一同を見ると、一おうはみんな、すまして、レディ然としてゐるが、一ヶ月も、一緒に居るとだん／＼欠点が見えて来る、大道の十圓均一に並べられるローズ物みたいにおの／＼どこかにきずがあつた。

生れつき頭のわるい者、數學が追試験すれ／＼の点であぶなくセーフと云つてすましてゐる者、居ねむりの上手な生徒、ブローケンな英語を得意で話す心臓の強い者、スポーツなら何でもだが學科はみんなきらいなスポーツウーマン、ひまさえあれば先生の似顔を描いてゐるマンガ屋、毎晩スカートをきちんと寝押しして頭髮に油をべた／＼つけて来るおしやれ、一日中ピアノをひいていたいと云うピアノリスト、數學の時間に詩を作つて居る文學少女、それから……およそこゝろ云々種々雑多な生活をセーラのかげにひそめてゐる教室の空氣は、尾崎にはほんとうに不思議に感じられた。

それは極端にマンガ化したグロテスクな都會生活、いや學校生活の斷面であると云えるだらう。彼女達はこせ／＼と細かく他を批評し、自分が批評されて居ることを知らずに、生活をしている。例えば、大空をゆう／＼と流れて行く雲をみつめて、川原の土手に半日も居られる様なのんびりした心を持合わせて居ないのだ。中學校で

はこんな生徒はクラスに二、三人しか居なかつた。

この寮圍氣の中で、めづらしく大らかで、惡く云えばばんやりしている生徒は尾崎と他の二、三人の田舎出の生徒にすぎない。この二、三人は例えて云えば、やぶのかげに人知れず小さな花をつける白い小さな野バラといった感じである。他の生徒は、何か人工化されたどくどくしい色彩を持つてゐる。尾崎はこの色彩に何かなじめないものを感じた。

自分だけがクラスの中の人々と分離している様に思われた。

各々出身校も異り、性質も異なるが、互にとけ合つてゐる様に思われ、自分だけがとりのこされた様で淋しかつた。

いつ迄こんな感情がつづくか、尾崎は時がたつにつれて、水とどろが互に分離して土が沈んでしまふ様に、時がたつほど、自分もクラスの人々の中からはなれて行く様な感じがした。

あまりにも彼女達は實現に順應してしまつてゐる。過去をすてゝ新しい生活に何の不思議もなく、何の未練もなくひたり切つてゐる。それに對して尾崎は反感と云うか、憎惡を云うか、そう云つたものを感じた。過去の夢を追う者を彼女達は、ロマンティスト、おヤンチとか云つて笑う。それは、ほんとにアブレの見解であるかも知れないが、尾崎は時々、現在とそして過去の空間的、時間的差がめちや／＼に分らなくなつてしまふことがあ

つた。

しかし彼女が今、高校生として毎日通學していると云うことは事實であり、中學生時代は、もう過去のものであると云うことを斷言することも出来る。

尾崎はこゝろ云々不安定な、孤獨な寮圍氣の中に、じつと靜止しているかの様である。これからの生活はどう發展して行くか、知つてゐるのは神のみであらう。尾崎は一般に云う神と云うものは信じて居ない。しかし人間には解決することの出来ない、又、豫測することの出来ない事を知つて居るものが神であらうと思つてゐる。

彼女は、その神のみ知る生活に何か不安を感じ、現在の生活に疑問を感じ始めた。



しやぼん玉に寄せて

この美

その頃は、私も小さかった。

雨上りのさわやかな夕ぐれであつたと思う。めづらしく家の門の外で、私は、しやぼん玉を始めた。雨後の山々は洗われた様に、あざやかな新緑にもえて、その中腹には、白々と雲がなびき次第にうすれて行つた。斜陽をあびた雲は、紅に或はうす紫、黄金色と照り映えて、夢の様だつた。次々と變る不思議な形に、ぼう然として私はしばらく、それに見とれて居た。子供心にも美しく感じられたのであらう。風がさや／＼と吹きすぎる毎に葉未からは露が、はら／＼とこぼれ落ちた。しやぼん玉に、コバルトの空、紅の雲のうつゝた様は、おどろき話の中の宮殿のプリンスの、大事にして居る寶玉よりも美しかつた。私は、くる／＼とまわりながら、變る色彩に、小さな胸を、おどらせながら、夢を追うのかの様に、しやぼん玉をとばせて居た。しめりを帯びた、新鮮な果物のかおりのする様な、さわやかな風は、無情にも、生垣のみのりの葉かけに音もなくしやぼん玉を、誘うのであつた。まるで吸い込まれる様に、次々と美しい姿の片りんすらも残さず消えて行く。私は、ぼんやり消えて行く、

しやぼん玉を見つめて居た。「まあ、きれいだこと。」とたれかそばで、云つた。私は、はつと目を上げた。見えない美しい少女と、私より一つ二つ年上らしい少年が、こちらを見て居た。木々の葉の緑のせいか、姉さんらしい少女の横顔が、ひどく青白く見えた。「ぼく、しやぼん玉つかんで見たくなつちやつた。」突然、少年が叫んで、消えずに居た一つを追いかけた。風にのつて、しやぼん玉は、からかうやうに、上へ上へと昇つて、とても手のとどかない様に、高く昇つていつてしまつた。「修ちゃんたら。」姉さんらしい少女は、かすかにほく笑んだ。「これ、貸して上げる。」私は、少年へコップをつき出した。「うん。」少年は満足気に受けとつて、懸命に、しやぼん玉をとばし始めた。後で少年は、こう語つた。「あの日、お姉さん（彼女は、富美子さんと云つて、女学校の一年生だつた。）と、ぼく（修一さん、彼は、あの日、富美子さんが、修ちゃん。と呼んだ通り、修一さん）と云つて、五年生だつた。」は、君の家から、余り遠くない、丘の上の鐵道官舎へ、水戸からお父様が、轉勤になつたので、越して來たのさ、それで、お母様に、お使いい、なに、夕ご飯の用意のさ、おとうふ買いたのまれて、君んちの前の、おとうふ屋さんへ行つたんだよ。」それから後、私は、度々、その姉弟の家へ遊びに行つた。きれいに片づけられた茶の間には、大きなフランス人形が、ガラスの箱に入つて、茶だんすの上にさがされてあつた。私は、私の家のちがいの棚の上にある、御所人形や

京人形のふさ／＼した黒かみを思いうかべ、栗色のカラーされているフランス人形の髪が、不思議に思われた。修ちゃんの下には、そのフランス人形によく似た、小さな妹が居た。マキちゃんと呼つて、とつても、こつけない子だつた。私が遊びに行くとは、いつも一番先に、見つけて、丘の坂道を走つて來るのは、マキちゃんだつた。廣い縁でよく小母さんは、針仕事をなさつて居た。遊びに無中になつて居る私達に、大好物のお菓子や、果物を運んでいらつしたりなさつた。修ちゃんのお部屋は四疊で、机といすがあつて、空色の電氣スタンドがあつた。どんなに、それが、私をうらやましがらせたことか。何にせよ、修ちゃんの家は、私の家と異つて明るく、開放的だつた。私と云う子は、ほんとうに變つた子で、人ざらいつても云おうか、一人の友達も持たなかつた。いつも、うすぐらい座敷の文机に向つて、繪を描いたり、一人で、うらの樂山へ登つて椿の花輪を、こしらいたり詩を書いたりして居た。ようするに、孤獨を好んだのだつた、それは、うす暗い、廣い家敷、その環境のせいもあつたかも知れない。その頃の私は、病的なほど、目の大きい、青白い、やせぎすな少女だつた。その私が、どうした譯か、修ちゃんとは、氣が合うとでも云うか、すぐ仲良しになつてしまつたのだ。修ちゃんも、知らない土地だし、誰も知つて居る人達も居ないので、友達がないので、淋しかつたのかも知れない。理由はなんであらうとも、今にして考えて見ても、あんなに孤獨を好ん

で居た私が、修ちゃんだけでも、仲良しになれたことは、不思議なことであつたと思う。學校がすむとすぐ、修ちゃん、私をさそひに來た。「今日は、君のために、野原へ、花摘みに行つてやることにしたよ。」と朗らかに笑ひながら、生垣のやぶれ目から、もぐり込んで來た。でも、釣に行く修ちゃんのバツ持ちになることの方が多かつたようだ。せきれいが、私達のそばに來ては、ついでと飛び去つた。そんな時、よく修ちゃん、白秋や、藤村、それから、ワーズだつたかの詩を暗誦してくれた。「小諸なる古城のほとり、雲白く遊子かなしむ。……川の流れに千曲川を語り合つた。二人とも千曲川などは、見たこともなかつた。そんな二人を、野いちご取りに來た、子供達が見つけて、大聲ではやし立て、逃げて行つた。修ちゃんは、ある時、私にこう云つた。「どうしても、ぼく、よその奴らとは友達になれないや、みんな愚劣な奴ばかりだ。けんかをしたいなら、正面からぶつかつて來りやいゝのに。はつきりしない奴は大きらいだ。」と

ある雨の午後だつたと思う。五年生の男子の中で、村の有力者の伴の源吉と云う、一番らんぼうな子が、私を廊下へ呼んで、「おめえ、よそもの修べなんかと仲良くなつて、何でえ。」とすごいけんまくで、がなり立てた。私は、びつくりして大きなひとみを、いつそう大きくみひらいた。「何、にらむんだア。」源吉はそう云うか

云わないうちに、平手うちで、私のほうを引つぱりたい。その時、アケミちゃん云う、やはり資産家の娘が、わきから口を出して意地わるく、「酒屋のお嬢様はな、土地者でねえだろ、源吉。」と云つた。私は口惜し涙がほくを傳い落ちるのを感じた。「泣いてるやあ、泣いた。」友達達は、どつとはやしたてた。土地者でないぞと、アケミちゃんが、云つたとおり、私は、村で生れたものではなかつた。幼時から体の弱かつた私は、父の實家であるこの村の伯父の家にあづけられていたのだつた。父母も、そして、兄弟も、東京の四谷に居ると云うことも知つて居たし、夏休みなどには、必ず遊びにやつて来た。私も一度か二度は、東京の家に歸つたことがあつたが、すぐ体を悪くして田舎へもどつて来るあり様だつたので、伯父の家には不幸にして、子供が居なかつたので、末子でもあるし、そんな理由のもとに、とうとう私は、伯父の子供になつてしまつたのだつた。淋しい、孤獨な、變つた子だつたと云うことも、こんなことや、病弱のせいだつたのだらう。また、何故か、修ちゃんとなつたことと云うことは、二人とも、土地者でないことと云うことからだつたかも知れない。この村の人達は、へんに、他から入つて来た人々を冷遇した。比較的、私は、伯父と私うバツクがあつたので、たいして、いじめられもせず、お嬢さん／＼と云われて居たのだと思う。……………「泣いてゐる／＼。」女の子も、男の子も一緒にやつてはよし立てた。丁度そこへ、先生のところへ呼ばれて居た修一が歸

つて来た。「どうしたんだい。」彼は、げんそうにあたりを見まわした。「わつ。」とまわりに居た連中は、わめいてとび散つた。「泣くなよ、どうしたんだい。」と、取り残された私のそばへ、寄つて来た。たまらない口惜しさに、私はたどしやくり上げるだけだつた。「修ちゃんのお嬢さん。」アケミが口をとがらして云つた。それを修ちゃんは聞いて、がつとなつたらしかつたが、くちびるをかねて、うつむいた。今も、受持の先生から、注意されて来たばかりだつた。つい二、三日、修一のくつが、下駄箱からかくされて居たのだつた。その頃、この村では、皮ぐつなんてはいて居る者は、一人も居なかつた。それで修一をねたんでか、ごみ箱等にかくしてしまふ子が居た。もちろんそれは、源吉らだつた。修一は、或日、くつをいぢつて居る源吉を見つけてしまつた。修一は、もうがまんが成らないので、「だれだ、人のくつをぬすむ奴は。」とどなつてしまつた。そこで、五、六人を相手に修一は、けんかを始めた。が、すぐ先生に見つかつて、止められてしまつたのだつた。「けんかしや、いけない。」修一は、そう自分に云い聞かせて、じつとがまんした。「べそかいて、二人で。」源吉や、その子分たちは、口々にはよし立てた。修一は、こらえ切れなくなつた。こんなのに／＼しられて、だまつて居ては、男らしくないと思はれるだらう。それが彼には口惜しかつたらしい。「何だつて、チイちゃんをいぢめるんだ。」「ば／＼強い。」と源吉が、あざ笑つた。修一はもう無中だつ

た。源吉に、武者振りつくと廊下で、取組合のけんかが始つた。始めは、彼の方が優勢だつたが、次第に、多勢にはかなわなくなつた。源吉は、勝ちほこつた様に、「立ち上ると、修ちゃんを、引つぱり出して、投げとばした。ひどく投げられたと見えて、修ちゃんは、下駄箱の下、コンクリートの床に、うつ伏せになつたまま、動かなくなつた。私は、狂氣の様になつて、走りよつて、修ちゃんをゆすぶつて、しやり上げながら、「修ちゃん、修ちゃん。」と叫んだ。誰も何とも云わなかつた。この事があつてから、私は、伯父から修ちゃんと遊ぶことを禁じられた。修ちゃんも、さそいには来なかつた。どうしてかと云うと、修ちゃんは、足をねん挫して、近くの病院に入院したからだつた。私は、伯父の目を盗んでは、學校歸りに、修ちゃんの所へ、お見舞に行つたものだつた。

夏も過ぎ、秋がやつて来た。あれは二十日近いある嵐の夜だつたと思う。鐵橋の流失を防ぐため、修ちゃんのお父さんが、作業中あやまつて、川へ轉落し、亡くなつたのだつた。修ちゃん達は、お母さんの里の、浦和へ行くことになつた。彼は私に、ワーズワースの詩集をかたみにと云つてくれた。私は、小さなこけし人形を贈つた。それは秋もふけたある日の夕ぐれのことだつた。修ちゃんも、夏中、たんせいして作つたコスモスが、なよ／＼と咲き亂れて居た。「もう、永久にこの村に、ぼくはお別れする。ちつとも悲しいことはない。でも、君に

別れるのは、どんなに悲しいか。」と彼はつぶやいた。富美子さんは、私の髪に眞白い大きなリボンをだまつてむすんで下さつた。私はたまになく淋しくなつた。修ちゃん達の去つたあとの私は、又もとの一人ぼっちになつてしまつた。夕ぐれになると、丘の上の修ちゃんの家、それはもう空屋だつたが、そこへ行つては、じつとコスモスをみづめて居た。一月に一度位づつ修ちゃんからは、お便りが来た。一年ほどたつたある日、「ぼくら一家は、満洲に行くことになつた。」と云ふ意味のハガキが、とゞいた。その後、何のおとづれもない。去るものは何とやらで、私の脳裡から、修ちゃんのこと、いつとなく消え去つてしまつた。

それが、ふと、今、小さい子供達のとばしている、しやばん玉を見ていると、遠い／＼過ぎ去つた日の思い出が心に浮かんで来る。それは、事實よりも、美化された情景なのだ。

(一五・五・二〇)



彫らない碑文

—今は空しい墓の石に
天は雨の涙をそそぐ—

八 木 東 作

「私」という一人稱を使つて書いていても、この「彫らない碑文」は、必ずしも私自身の死んだ父のことばかりで全部書かれてあるわけではない。いや、事實、私の父のことであつても、また私の友だちの誰れかの父のことであつても、それは何うでもよいのである。事實そのまゝを書くほど愚かなことはないし、もはやこの世に形さえとどめていない「一人」の平凡な死者のために作られる碑文ほど、また滑稽なものはない。

私の父は四十才の時、ふとした機縁で十六才の教養も極めて低い娘と二度目の結婚をした。それが彼の三十年に近い後半生をともした妻なのである。父の当時の考え方に従えば、妻は家財の一種にすぎないのであつて、女を唯なまいきにするばかりの教養などは無用だつた。体が丈夫で従順で、夫の命令通り毎日だまつて働いていればよいというのだつた。私の父は当時ある小さな町で商業学校の教師をしていたのだが、絶えず野望に燃え立つていた彼は、到底それを長く續けてはいなかつた。程

なく彼は先輩に引立てられ、少し離れたある大都市で、つづれかゝつた二流銀行の支配人になつていた。ところが第一次世界大戦の景氣で銀行が立直り、同時に彼は一流製鐵會社に移つて社長となり、二流印刷會社の大株主を兼ねていた。彼の一生を通じておよそ得意の絶頂と思われるのは、この時であらう。その一流製鐵會社を一部に重役の隠微な策略に巧く陥れられて追い出され、二流印刷會社が増資によつて株の配当をふやす「増配当」を繰返した結果潰れてしまふと共に、彼の寂しい晩年が始まつたのである。その後彼は昔に變らない野望をもつて種々な泡沫會社の創立に参加し、常に「社長」に推されていた。然も彼の生計を保證しているものは一流製鐵會社及び二流印刷會社時代に殘した幾らかの財産以外の何ものでもなかつた。いや、その財産すら時には新しい事業のために割き與えなければならなかつた。そして後には、父の純金の腕輪やメタルなどという装身具が手離され、電話や家が抵当に入つて利子の支拂に苦められるよ

うになつた。

私の父は六十七才になつていた。その妻は四十三才だつた。私はその妻とはなんらの關係もなかつた。私は父がその妻と結婚する約半年前に別れた先妻の腹から生れた一つの生命なのである。父の妻は、結婚してから三十年近くのあいだ、毎日、朝から晩まで家の中で眞つ黒になつて立ち働いて、ほとんど外へ出たこともなかつた。娯樂といえば、夜すつかり用事がすんでから、電燈の下で居ねむりをしながら、ラヂオのスピーカーがうるる浪花節の「森の石松」「佐渡情話」などを聞くのが唯一のものであつた。あゝあゝ、よその奥さま達のように映画を見に行くでもなし、遊山旅に出かけるでもなし。と、彼女は常に口癖のように不平を言つていたが、家には女中も一人おいてあるし、また、五年前に舊制の女學校を卒業した娘もいるだから、それらに少しぐらい家のことを任せて、行きたいところがあれば行けばよいのであつて、行かないのは自業自得だつた。いや、私の知るところでは、そんな不平は言つていても、彼女には見たい映画も行きたい旅行地もないに相違ないのである。その證據に、たま／＼父が機嫌のよい時、映画にさそつたりすると、もう髪を結つたり着物を着かえたりして出かけて行つて、大勢の人中で氣苦勞をして歸つて來て着物をたゝんだり藏つたりするのは堪らない。家で寝轉んでラヂオの浪花節でも聞いている方が何れだけ極樂だか知れやしない。というようなことを、彼女は言つたものであつ

た。それに、なるほど疑いもなく彼女は家で一日中忙がしうに動きまわつてゐるが、何がそんなに忙しいのかということに就いては、彼女以外おそく神様でも御存じないであらう。どんな仕事にも成果がある。彼女のにはそれがない。炊事と掃除と洗濯とは一切中がやつてしまふ。縫物は仕立屋まかせである。夕方歸つて來る父の晩酌の膳にだつて近所の料理屋あたりから取り寄せた通り一べんの品々が寂しく並ぶばかりである。要するに、彼女が一日中やつてゐるのは、結婚当時の十六才の愚かな小娘が恐らくしていた事と同じような、まゝごと遊びにも類することであつた。

全く彼女は、あらゆる点で、十六才の小娘から少しも進歩を見せていなかった。身じまいに甚しく無關心なので、年よりも遙かに老けてみえたが、物欲と我が子への動物的な愛著と以外、中年の人妻らしいデリカシーも夫との共感も認められなかつた。父は、そこに堪えがたい不満と寂しさを感じていたが、結婚の時、余りにもおろそかな考えで相手を選んだ父のあやまちが、この時になつて厳しく報いられたのである。

だが、父は、彼の妻を、愚かではあるが善人だと思ひ、憐みの情をもつて、多くの不満を忘れるようにしてゐた。それにも拘らず、彼は、家に居る時、自分でも確實に正体がかめぬような憂うつに襲われ、彼の妻の取るに足らぬ行爲や言葉をとらえて、激しい怒りを爆發させることがあつた。私を別にして、父と彼の妻との間に

は私より三つ年下の息子と二人の娘とがあつたが、その子達は父の怒りが爆発する度に別の部屋にのがれて、あとからやつて来る母親を待ち、その周囲を取りまいて母親の不平に加勢をした。その子達は、母親の動物的な愛情のため個性を失つていた。彼らは母親の使う方言と用い處を誤つた言葉とをそのまま喋り話をし、母親と同じ情意の動き方をするようになっていた。いつの間にか彼らは母親を中心にして、同じ家に住みながら、父の側を離れて暮すようになっていた。父が奥座敷に來れば彼らは茶の間へ、父が茶の間へ來れば彼らは玄關脇の部屋へとのがれた。父の妻は、それを自分の勝利のしるしでもあるかのように満足していた。

私は彼女とつまらない争いをして父の怒りに触れ、一年前に家を出て、近くのアパートに住みながら、ある製藥会社の宣傳部員として僅かな給料で辛くも一人の暮らしを立てていた。ある日、父が病氣だという事を途中で會つた遠縁の男に聞かされたが家へは行かなかつた。その男の話では大したことでもなさそうだったからである。それから二週間ばかり後、友達と酒を飲んで強が酔つた私が夜晩く或る街角にさしかかると、そこでばつたりと父とその妻の間の息子二人と出會つたのである。私より三つ年下の息子とその直ぐ下の娘とであるが、まるで焼け出されたいに二人とも手につつ大きな風呂敷包を下けている。何だそれは、何が入っているのだ、と尋ねると、これはおしめだ。と息子の方が答える。お

しめをどうするのだ。となおも聞くと、お父さんのところへ持つて行くのさ。お父さんは直ぐその病院で今夜もう死にそうなのよ。と今度は娘が言う。少しも知らせを受けていなかったもので、私は自分のアパートから直ぐ近い病院に父が死に瀕していることも知らずに酒を飲んでいたのである。私は二人に病室の番號を確めると一旦アパートに歸つて少し酔をさましてから出かけた。一年前に激しい怒りを受けたまま會わなかつた父は、私の顔を見ると頭を僅かに動かして枕元へ來いという様子を示した。枕元へ坐ると愈々自分は駄目だというような事を父は言い、私は二言三言そんな弱いことを言つてはいけなと勵ました。明らかに父は私が來たことに満足の様子だつた。醫師は翌朝まで持たないとやつていたが、翌日の晝頃になつても少しも變りはなかつた。父は七八年前に或る女事務員との關係があつてその間に二人の子供が出來ていた。親類の一人が父の心を察してその女に知らせてやつたので夕方女が子供を二人連れて會いに來た。女と二人の子供とは並んで父の枕元に坐つたが、何も言わない内に泣き伏してしまつた。その時私は傍らを見てアツと驚いたのである。父の蒲團の横のところには父の妻が唯一人立ちはだかつて馬鹿にしたように態と口をポカンと開いて、泣いている三人を見おろしているではないか。私はあわてて立ち上つた。そして、あつちへと彼女の袂を引いて他の者が行つている別室へ席を外させたのである。その翌日、父は退院して家に歸つた。

どうせ死ぬものなら家で死にたいから退院させて呉れと父が言い張つてきかなかつたためである。だが、あとで考えてみると、その時父にはもはや三万何千圓かの金しか残つていなかったのだ。入院料や藥代の心配もしていたらしいのである。家に歸つた父は離座敷の一間に寝せられた。翌日勤め先に出ていると父の妻の末娘が電話をかけて、お父さんがあばれて困るから早く來てよという。行つてみると、父が茶の間の次の座敷へ寢床を持つて行つてくれというのを、茶の間は父の妻とその子達が集る場所になつていたので彼らがそれを嫌ひ種々と難癖をつけて思ひ止まらせようとしていたのである。こんな寂しいところ俺は厭だ。この通り頼むから何とかして向うの座敷へ連れてつておくれよと、父は仰向けに寝たまま手を合せて私を拜み、それからクス／＼笑いながら天井を指さして、そらあんな恐い顔もあるだろうという。なるほど、見ると天井の木目と節穴とが奇怪な人間の顔をこしらえている。ともかく私は父の妻をだますように説いて寢床を茶の間の次の座敷に移した。

家に歸つてから父はだん／＼元氣がついて來た。そして二ヶ月ばかり後には靜かに歩いて近所を散歩ぐらいするようになった。それまでも父は人を頼んだかりして金のために奔走をしていたが、愈々ハイヤーに乗つて自分用を足し始めた。その無理がいけなかつたのか、何か食物が悪かつたのか——いや、それから少し後に醫師がソツと嘔いた父の病氣は胃痛だつたのだから、その少しよ

くなつたのも病氣の一つのコースに過ぎなかつたのか——突然また悪くなり出した。父は一日置きくらいに私を附添いに連れてハイヤーで前に入院していた病院へ行つて注射や食道の洗滌を受けていた。病院に行くまでと待つてい間とに如何にも苦しそうに溜息をついている父は、醫師の前に出るとサラリと變つて元氣を装つて態度と大きな聲で話をしたり笑つたりした。醫師が入院を勧めると、なあにこうして通えるあいだ通わせていだきます。何うもあの病室で寝るともう氣が減入つてしまつていけません。と事もなげに笑つてすませた。そして外來患者が大勢いる待合室のベンチのところまで來ると、力が抜けてそこに暫く横になつたままだつた。家に歸ると今度は、金策のために方々に手紙を出す用事を私に頼むのだつた。それは大抵古い貸金の取り立てだつたが、こちらの窮状をありのまま言つてやつても返してよこすものはほとんどなかつた。父と私は時々いろ／＼な金働きの空想を話し合つた。大抵は私がすばらしい外國の小説を翻譯すると父が知り合ひのつてを求めて何處か大きな本屋から出版させる。忽ちそれがN新聞社の出版文化賞を受ける。本は素晴らしい版を重ねる……といううなことである。そして遂に、父のなけなしの金の内の幾らかと、私が自分で働けた僅かな金とを合せて、外國から本を取り寄せたりした。その本は、父が死んだ後、アパートの支拂に困つた私が、父の靈に許しを乞ひながら古本屋に賣つてしまつたが……父と私がそうして話

をしているところへ、あの女事務員の上の方のハオになる男の子が一人で見舞いに來た。子供が座敷に入つて來ると、父は嬉しそうに、おとおと叫んだ。そしていろいろ今の生活の様子などを聞いた。私とその子とは二尺ほど間隔をおいて對坐していた。これ、お前の叔父さんだよと、父はやがてその子に私を指で差し示して、涙聲で言つた。女事務員との間に出來た子供が家へやつて來たことに就いて、私がアバートへ歸つてしまつたあとで、父の妻は父の枕元にやつて來て惡口をたき始めた。一体私を何だと思つてゐるんです。人を馬鹿にするにも程があります。それじゃあ家んなかがあんまりだしがなさすぎるじやありませんか、とまくし立てたので、死ぬか生きるかの病人の枕元に今來てそんなことを怒鳴る奴があるかと、父の方でもいきまゝく。父の妻も黙つてはいず、またやり返す。それを彼女の三人の子達は横の向うで面白そうに見物してゐるのであつた。そして、父がさん／＼いきり立つた時、仕末に困つて一番下の娘を私のアバートへ呼びよこしたのであつた。

——胃痛といへば、もう、どうせ治らない病氣じやないか。そんな病人のためにはほかの者まで共倒れになつちや堪らないよ。こんなことをしていたらしまいに私達の着物まで手を付けるようなことになるからね、どうだろう。抵当にはいつてゐるこの家をさつぱりと手ばなしして、もつと小さな家へ移つて、いろいろのことと節約したら、少しのお金でも長もちがするだろうと思ふのだ

舊制女學校を出た娘と、それより二つ年下の娘と共に——とにかく、用意があるならばそれは後のために残しておけばよいでしょう。お父さんだつてああ言うんだから、まだ／＼あなた達のものにも来て手をつけるようなことはありますまいよ。手をつけられぬ時になつて逃げてでも晩くはありますまい。と私が言うと、そうだね。それに三ヵ月後に、もしもその事業の金が本當に入つて來るような事があつたら馬鹿を見るからね。と出て行く話を思い止まつたのであつた。その頃から父は益々目立つて衰えて行つた。彼はよいよい最後の金であるらしい一万圓あまりを私に見せ、彼の妻が今もなお浪費をしてゐることを語り、その金を少しずつ私が出す金として彼の妻に渡してくれと言つたのであつた。ああ誰か覗いてゐる。とその時父が金をかくしながら枕元の障子を指さした。障子を開けると、上の方の娘が廊下を向うへ逃げて行つた。怪しからん奴等だ。どうしてあいつらはあゝいうふうなのだろう。あゝ、無念だ。と父は齒齧みをした。一万圓あまりを、私は三度か四度に分けて父の妻に渡した。

その金がすっかりなくなつた頃、それは少し寒い日だつた。私が父の家へ行つて、寝てゐる座敷へ入つてみると、父は、もはや何もかも失つて力も抜けてそこに長い間投げ出されてゐるやうに、顔も手も垢と鬱血のため、ドス黒くなつた骸骨のような体を、横にねじくれさせ、枕も外したまゝ、こん／＼と眠つてゐた。誰も構わ

が。それをお前からお父さんの耳に入れてみてくれなにか。と、ある日、私は父の妻から頼まれた。私は父の機嫌のよい時を見て、それをともかく通じた。すると父は彼の妻を呼んで、とてもその不可能なことをこま／＼と説いた。自分は昨年か或る大事業に關係してゐる。それが三ヵ月後に成功すると相当まとまつた金が入つて來る。今この家を離れて小さな家にでも移ろうものなら、自分の社會的信用は忽ち失われ、たとえ事業が成功しても自分がそこに持つてゐる地位は他人に奪われてしまふであらう。というのである。困つたものだね。いつもの出來るか出來ないかわからない事業をあてにして自分の足もとも見えないのだから。ぢやあ、こうしたら何うだろう。私達だつて澤山もない着物などを失うのはいやだから、お父さんが不承知なら仕方がない。私達だけ別に小さな家へ移ることにしたら。と、父の前から退いた父の妻は、また私にそんな相談を持ちかけるのである。だつて、出て行つたところで第一にみんな食うのに困るでしょう。という、少しムツとした様子で、むろん私達にその用意があればこそ言つてゐるのさ。と、とう／＼口をすべらした。私はかねてから、父の妻が父や私に隠してはいるが、長年家計から少しづつ頭をはねて相當の額にのぼる金を貯えている事を知つてゐた。その金をジツと大切に抱いて病院にも入らずに金の工面にあくせくしてゐる父に寄生してゐたのである。私より三つ年下の二十五才で、病身を理由に無爲徒食する息子と、五年前に

ないために爪は長く伸び、顔中の髯はよごれ、眼やにや鼻くそや耳くそが黒くこびりついてゐた。その翌日たずねると、醫師が來ていて、どうも今夜あたり駄目らしいですよという。醫師が歸つてから、父の妻と三人の子達とが枕元に坐つた。父の妻はともかく、三人の子達は最近では父の側へ來るのはそれが始めてだつたに相違ないのである。皆は代る代る父に聲をかけ、父がろれつのない口で何か答えるのを面白そうに笑つたりした。父は、一人々々の顔はもはやはつきり見えなかりかつたが、およそ顔の輪廓などで見當をつけてちやんと皆の名を言ひあてた。そういう事でも父には内心非常に嬉しきつたに相違ないのである。彼は何くれとなく皆に親しみを寄せようとしてゐるらしかつた。皆が去つて私一人になつた時、父は、わからんわからんと、うわごとのやうにいつた。そして、俺はわからん／＼／＼といつた。でもいつまでも繰り返して言つてゐた。夜なかの十二時になつても父はそのままだつた。私は父の体力が人並以上に強いことを常から知つてゐたので、翌日一ぱいは大丈夫だろうと思つた。それで、疲れを休めるため一先ずアバートに歸つて寝た。ところが翌朝早く遠縁のある男がやつて來た。部屋に入るなり、お父さんは二時間ばかり前に死んでしまつたよと言つた。よし、ぢやあ直ぐあとから行く。私は蒲團の中から答えた。その男が行つてしまつた後で、私は蒲團の中へいきなりもぐり込むと、大きな聲を立てて泣いた。可哀そうな私の父！それは

人間が親に死なれた時にだけ泣く一生に一度か二度の涙だつたかも知れない。然し、私は父の死にざまが何よりも可哀そうでならなかつたのである。私は、それから直ぐ家へ行つた。父の体は病床に横たわつたまゝ、手がつてなかつた。死体の胸に手を当て、見ると、まだ底の方に温もりが感ぜらる。ふと、父が生きかえつたら……と云う考へが浮んだ。しかし、生きかえることは父のため決して幸福ではないだろう。むしろ父は、死によつて不幸から逃れることが出来たのではあるまいか。そんなことを考える内に醫師が来た。やがて證明がすんだ父の体をはだかにし、湯で全身を洗いきよめた上、顔をきいれに剃つてやり、翌日また行つて、届いて来た棺に納めたのであつた。葬式の費用は、方々から集まる香奠で足りた。埋葬費用は私が或るところから借りた。寺は關西にあつて住職とは親類だつた。

父の一週忌が来た。私は、父の先妻を南國の或る半島に訪れた。それは五年ほど前にその所在を知つた私の眞實の母であつて、彼女はそこで洋裁學校を經營してゐた。さきに父の埋葬費用を出してくれたのも、彼女だつたのである。私が歸る時、彼女は、私に旅費を與えて關西の父の墓に詣つて來いと勧めた。そして、お墓に水をかけるのですよ。と、彼女は注意した。ところが、私が關西の親類の寺に夜着いて、翌朝起きてみると大變な雨なのである。こんな大雨でもやつぱり墓に水をかけなければいけないのかしらと、妙に思いながらそのままブラ

リと傘をさして墓場へ入つて行つた。私は、父の墓に半分傘をきせながらしやがんだ。私は、母が父のために少しでも涙をそいでくれていることを非常に嬉しく感じていたので、そこへ来るまでは、もし死者に靈といううなものでもあるなら、どうか母の幸福をいつまでも護つてくれるように父の靈に頼んで置くつもりだつたのだが、さて、そうして考えてみると、墓石の下には、あの電氣で焼かれた紙のようなベラ／＼の骨片が納められてあるばかりである。私は何だか拍子抜けがしたような氣がして立上つた。そして、お墓に水をかけるのですよといつた母の言葉を思い出して、大雨にきれいに洗われた墓石の頭に二つ三つ落ち散つていた枯松葉だけをつまんで捨てた。晝頃愈々その寺を出發する時になつて、また母の言葉を思い出した。雨がまだ盛んに降つていた。けれど、彼女がそのために自分をここへよこしたのだらうからと、愈々決心して關伽棚へ行つた。そこに竝んでゐる桶は皆きれいに洗つて乾かしてあつた。ふと私は、その寺の老和尚の妻が、女中のようによく働く息子の美しい嫁を、事ごとにきびしく叱り飛ばしてゐることを思い浮べた。これをよごしたら、またあの可憐な花嫁の手数になるのではあるまいか。——私はもうやめることにした。もはや、死者とわれわれとの間には何のつながりもなくなつたのだ。そこで、死者のためにではなく、生きてゐる人々に讀んで貰うために、この「彫らない碑文」を書くことにしたのである。

詩

喜び

古川セツ子

梅園をさまようとき

世界の最も幸福なる者として

花びら一つちるのを眺めて

世界の大きいなる自然を愛し

なま暖かい風は雲にのり

日本海に向つて走つてゐる

その土産は途中でみた

世界のたのしい物語りの数々

とびまはる私の心は

夕陽を追ひ月の光に休み

とけきれない小川の水にゆらぐ

葦の枯葉に小舟を流し

星空の下に歌を唄ひ

春を迎える最も幸福なる者として

天にもとけよと双手をかざし

誇らかな喜びの中に果なきを見つめる

心

景

子

につこり笑った人の

その奥に冷たい氷があつたことを

多くの人々は知らなかつた

やさしい春風が春の野邊に

そつと通つていつた時

その人の心にも

しづかにとけつゝあつた

さんさんとかがやく太陽に

その心はとけつくし

野分のさびしく吹く頃に

その心は暗い影をさした

冷たい冬のおとずれに

すべてが雲におゝわれた時

涙にぬれた人の

その奥にもえた炎のあつたことを

唯もが知らなかつたでせう。

詩片

大垣

純

花―大地の苦しみを

一時にぶちまけて

くれるもの

だからあんなに美しい。

詩―抒情の樂器

小さな部屋で

一人味へる。

人間―運命の奴隸

我々は運命に

さからふ事は

出来ない。

夢―悲しき玩具

人々は上手に

これを操っている

すねたお坊ちゃんに

奥崎 馨

哲夫：「時坊。(突然呼びかける、返事なし)。

「時坊。(更に返事なし)。

「トキボ。(時坊冥想にふけて居つたらしく、ふいに呼ばれてあわてる)。

時坊：「何だ。(哲夫時坊の顔をみて、くすんと笑う)。

哲夫：「真面目な話をするんだから良く聞けよ、時坊、好きな女の子が居るだろう」。

時坊：「何さ、籤から棒に、そんな變な聞き方するなよ、無禮じゃないか」。

哲夫：「うん、ごめん、けど、いると言へよ」。

時坊：「うん、居る、たくさん居るぞ(笑ひ乍ら言う)あの女學生、今日も時坊の顔見てたぜ、視線が合つても、彼女平氣なんだから、大がいに負けちゃうさ」。(大聲に笑う)。

哲夫：「羨ましい次第さ、女學生に好かれるなんて、實際時坊の顔可愛いからなあ」。(哲夫わざとらしく時坊の顔をしげくと見入る)。

時坊：「可愛いいつてか、變な事を言うなよ、大の男がさ

可愛くたつて何もならんさ。いやだぜ、そんなの」。(二人共に笑う)。

哲夫：「これから素晴らしい事を聞かしてやろうな」(改つた様な顔をする)。

先期、一人で日陰を取り乍ら向うへ行つてみたんだよ、俺が」。

時坊：「本当かな」。(笑ひ乍ら)。

哲夫：「本当さ、まあいいからだまつて聞いて居れよ。暑かつたからなあ。あまり人の影もなかつたから、大の字になつて木の下で寝てたら、なんだと思ふ」。

時坊：「へびか」。

哲夫：「へび、可愛い事言うなあ。この俺がへびに驚いてちや面目ないぢやないか」。

時坊：「へえ、驚いたのか」。

哲夫：「あれが驚かずに居れるかつての、女學生二人が横に来て「もし」言つてんだ。驚くも驚かねえも時坊のおかげさ、その二人がだ、何かと思つたら「これを失禮ですが、あなたのお友達に渡して欲しいの」つてんだ。へえ、と思つたよ。第一俺達みたいによ、人間の出来そこないみたいなものには、誰が友達やらさつぱり知らないやね。(一寸口をつぐむ)そう言つてやつたら「あのね、チエツクのシャツにコンビのクツをはいてる方よ」つてんだ。はあ、これは時坊だな、と思つたよ

詩

合歡の花

千 草

合歡の花が咲いたよ

淡い色の花だよ

合歡の花はやさしよ

そつとそつと

咲いてる

合歡の花は咲いたよ

淡い淡い夢見て



俺は。だからこれを預つて來ましたようだ。(哲夫ポケットより角封筒を出す)。

時坊：「へえ、さつぱり知らないね」。

哲夫：「よせよ、今更」。

(時坊封を切つて讀む、哲夫のぞく)。

「すねたお坊ちゃんに送ります」。

四ツ葉のクローバは畸形兒なんですよ。でも、幸福のシンボルにされてますからお送り致しませうね。

可愛い坊ちゃんの爲に。

アデュー

女學生より

時坊：「とうとうやられたよ、あの女學生に」。

哲夫：「すねたお坊ちゃんに、か(哲夫感心し乍ら)ふ

うん、いいなあ」。

(二人おほ聲で笑う)。



スケッチ・ブック の人氣

中 柴 光 泰

アメリカの作家で、明治年間に我が國に最も馴染深い者はワシントン・アーヴィングである。フランクリンは所謂作家ではない。エマーソンは哲學的文人ではあつても作家とは言われない。アーヴィングはアメリカ純文學の草分けであつた。本國においても、そして日本においても。明治四年に出た中村敬之の有名な『西國立志編』(英人スミイルズ原著の『自助論』の譯)に早くも話聖東・意爾平といういかめしい名で顔を出して以來の古いお馴染みである。カール・ザン・ドレンは『アメリカ文學序説』の中で、『彼はヨーロッパに向け、アメリカは森の哲學でもなく、ヤンキーの風變りでもなく、驚仲間の論戰でもない或物を生み出したという思いもよらぬニユースを送つた。』と言つてゐるが、このニユースはヨーロッパばかりでなくわが日本にもとどいた。たゞ明治の日本もこれを『思いもよらぬ』ニユースと受けとつたかどうかは問題である。又ザン・ドレンは『大西洋の兩岸は彼の特殊な功績に吃驚して、實際以上に大なる一般的功勞が彼にあるように考へた。』と述べてゐるが、大西洋ならぬ太平洋のこちら側の日本も果してその通り

だつたかは問題である。アーヴィングは新世界が舊世界におくつた最初の大使である(サツカレーの言葉)と言われたが、日本にとつては果してどんなものであつたか。とにかく彼はやつて來た。乗つて來た船の名はスケッチ・ブック號。多數の日本人がこの文學の黒船を非常な好意をもつて迎へたことは事實である。

もともとアメリカと舊世界ヨーロッパとの關係はアメリカと日本との關係とはまるで違ふ。アメリカは長いことヨーロッパの植民地として存在してゐたのが、獨立戰爭によつてその紐帶が斷られたのである。アメリカの人々はかつてのヨーロッパ人であつた。従つて當初のアメリカ人は、ちやうど異郷にある息子が古里へ消息を送るやうに、母國であるヨーロッパへ色々なこと書き送つた。最初は探險の、植民の、新大陸での生活の報告。獨立後は、威勢のよい新國家の政治や經濟や哲學、宗教の叫び聲がいくら獨立によつて幅がひろめられたといつても、どん／＼大西洋の波を越して鳴りひびいた。ところが日本には、このどちらもうそ澤山は入つてきてゐない。時々迷ひ手紙のやうにまぎれ込む舶來書もあつたが、あるいは話好きな宣教師や漫遊客がつれ／＼に語り傳へるアメリカ繁昌囃しもあつたが、このやうに大西洋の幅太平洋の幅の差くらい條件の違ふ日本にとつて、アーヴィングの出現のニユースが同じく／＼の差をもつて響いたことは考えられる。だから日本にもフランクリンやエマーソンと彼を見比べるだけの予備條件があるにはあつ

たのである。しかし、第二次米英戰爭後の國交上のくすぶりの消えやらぬイギリスとは全くわけが違ふので、『スケッチ・ブック』の功績で文學上の全權大使視されるやうなことはなくて、たゞ好しい客人という格であつたやう。周知の如く『スケッチ・ブック』は作者のイギリス滞在中の述作で、作者の序文では大いにイギリス人をほめ上げ、出版を推舉したのはウォールター・スコットであり、内容の大部分は作者のあた／＼かい眼に映つたやうなわしいイギリスの風物や世態、加うるに美しくも優しいアメリカのロマンス。それはバイロンやディケンズの激賞するところとあつた。文學外交官としてこれ以上の働きはあるまい。大抵の惡感情も消えてなくなる。このやうな因縁の無い日本の場合、アーヴィングの受け入れの重心が『スケッチ・ブック』ひとつの實力にかゝつてゐたことは當然と言へば當然である。もちろん史的研究の未熟な時代における文學受用の在り方には、ある特殊な作品だけが孤軍奮闘する場合が多い。

さて、『スケッチ・ブック』は主としてどのような経路で日本に入つてきたか。その一部が英語教科書の中に採用されて渡つてきたのである。最初はアメリカの教科書、次には日本人の手になる教科書。フランクリンとアーヴィングほど教科書と縁のある者は少ない。しかし三十四編の紀行や隨筆や物語の全部がとり入れられたわけではなくて、その中の『リッパ・ザン・ウインクル』が最も多く、次に『航海』や『妻』などの作品がつゞく。

アーヴィングを『スケッチ・ブック』が代表し、『スケッチ・ブック』を『リッパ・ザン・ウインクル』が代表してゐる形である。言うまでもなくこの作品は『スリーピー・ローウ傳説』とならんで、ホーソンやポーを経て燦然とかぐやくアメリカ短編小説の源泉をなすものである。このやうにして彼が我が國の學校の教室に長く坐り込むにつれて、廣く明治の青少年に知られてくる反面には、白墨の粉にまみれることも多くなつて折角の文學性もうすれてゆく傾きがあつたことは見逃せない。他方また海外文學研究者や文人達にも讀まれ出し、又翻譯紹介の類も見られるやうになつてきた。明治十九年、山田美妙の編した『新体詞選』の中に丸岡九華の手になる、夕風わたるハドソンの 川の水上眺れば

いざよふ雲の絶間より 夕日の光紅に
山の端までも照掛る。 此處は名高きカーツキル。

という書き出しの『リッパ・ザン・ウインクル』の韻文譯が出てゐる。豊田實の『日本英學史の研究』で、譯者かをるはやはり美妙齋であらうとあるが、かをるは九華のことである。二十二年には森田思軒が報知新聞に『旅館の夕』、『幽靈新報』を譯載した。また思軒には『リースブリッジ・ホール』中の『肥大紳士』の譯があるやうである。森鷗外は二十二年、雑誌『少年國』に『リッパ・ザン・ウインクル』の譯『新世界の浦島』(後に『新浦島と改題』)をのせた。これは彼の口語譯發展の基礎的仕事の一つとして注目に價するもの。美妙齋の韻文譯と比較

するため左に冒頭の箇所を抜いてみると、
 ホトソンに沿うて登つて行つたことのある旅人は、
 屹度ケエツキルの山を覺えて居ませう。
 これはエベレッツチエンの山の幹から出た小枝で、遙に
 西に向つて、仰いで見れば、麓は河の畔に垂れて、
 嶺は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。
 四季の變、天氣の更は勿論、一日の中でも、一刻一刻に
 不思議にも色と形とを改めるは此山です。それだから
 この山の見える處に住む女房は、皆これを晴雨計にし
 ます。

好い天氣の續くときは、青か紫かの衣を着て、その大膽
 らしい界の線を翳の無い夕空に畫き、時としては、近
 き傍の森には、雲もけむりも見えぬに、その嶺は、風色
 の霧の環を掛けられ、西山に道入り掛つた夕日の最後
 の光に触れて、凱旋の人の戴く冠の様に光り輝きます。
 二十六年には新井清彦という人の「スケッチ・ブック」
 義」が京都で出版された。三十四年には淺野和二郎譯「ス
 ケッチ・ブック」が現われた。この本の序文に當時のこの
 本の流行を物語る言葉があるので引いてみる。「スケッ
 チ・ブック」は何れの講堂に於ても殆んど講ぜられる所
 はなく、又その翻譯註解等も斷編だけは往々見聞せる所
 たり。其狀恰も文章軌範、八大家文等が漢學書生の手に
 のぼりしにも髣髴たり。」ちなみに後年大本教の行者に
 なつたりした淺野は明治におけるアメリカ文學研究の功
 勞者として忘れてはならない。

翻譯註解あるいは一寸した紹介の一つ一つを拾つてい
 たら切りがないので、明治の文學者と「スケッチ・ブッ
 ク」との交渉の方を進めて行こう。徳富蘆花が熊本英學
 校時代「プロクン・ハート」を読んで、センチメンタル
 な感興に浸つたことは蘆花のところまで書いた。この一編
 も全編中の名作として有名なもの。國木田獨歩の日記(明
 治二十四年二月十七日)を見ると、「風邪、おそく起く、
 午前、小説を読む。午後、登校す。夜スケッチ・ブック及
 びマクベスを讀む。服藥して寝に就く。」とある。何をど
 うよんでいたかは不明である。永井荷風は「十六七のこ
 ろ」という回想記の中で、「東京の家からは英語の教科書
 に使はれてゐたラムの沙翁物語、アーベングのスケッチ・
 ブックとを送り届けてくれたので、折々字引と首引をし
 たことも無いではなかつた。」と書いてゐる。病氣で小田
 原で療養してゐた頃のことと、大抵は講談筆記と馬琴の
 小説を讀んでいたという。正宗白鳥は「外國文學につい
 て」という文章の中で「英語は、我々の學生時分には、
 小學校に於ても教課目に加へられてゐて、變則な不規則
 な教授振りでナショナルリダーなんかを、清新な頭腦
 にいたましく注ぎ込まれた。小學卒業後、私塾に入つて
 一方で文章軌範や靖獻遺言を學びながら、一方で「イソ
 ヅブ新」や「スケッチ・ブック」なんかを、「事ほどな様
 に」風の珍妙な譯讀振で學ばれた。」と書いてゐる。「スケ
 ヅチ・ブック」にはイギリスのクリスマス行事に關する
 四編、「クリスマス」、「クリスマス・イーヴ」、「クリスマ

ス・デイナ」が含まれていて、特にクリスチャンなどの
 愛讀するところであつた。植村正久は弟子達を集めて「ス
 ケッチ・ブック」の講義をしていたといふことである。夏
 目漱石が「坊つちやん」で有名な松山中學の英語の先生
 をしてゐたのは、明治二十八年の四月から翌年の四月、
 熊本の高尾に轉任するまでの一年間である。彼はこの一
 年間、「七つ夏目の鬼瓦」などと惡口は達者だが、さつぱ
 り勉強しない生意氣な生徒達をいぢめつけながら講義し
 ていたのが、「スケッチ・ブック」だつたという。文學者
 ならぬ英語學者達が、アーヴィングの流達典雅な文章に
 隨喜した例はいくつもあるが、その一つ。武信和英辭典
 の著者である有名な英文家武信由太郎が文字通り章編三
 たび絶つまで熟讀したということである。この國のアー
 ヴィングの利用價值がこの方面に多かつたことは注意す
 べきことである。この作家の日本移入は、學校教育と不
 可分であつた点、英語學習と結びついた点で、英米文學
 移入の主なる型をなすものである。彼の文學の持つ濃厚
 な精神とそのスタイルがそれにあつた向きであつたた
 めである。たまさか教室の外にあつても、やはり同じよ
 うに眼で見られた。意地の悪い批評の對象にもされぬ代
 りには、特に重要視もされず、たゞ多くの人に親まれ、
 愛された。この邊が此の作品の實力であつたかもしれない。
 少くとも日本においては。彼のアメリカ文學史上又
 は世界文學史上に占める座席についてなどは、明治の人
 達の深く知るところでなく、又問うところでもなかつ

た。たゞ明治三十一年の秋に行われた小泉八雲(ラファ
 デイオ・ヘルン)の東京帝大における特別講義「アメリカ
 文學について」中のアーヴィングに關する言葉は重要で
 ある。彼は「アメリカの散文はイギリスの散文に影響を
 及ぼした。作者は少いがその勢力は大きかつたと言わな
 ければならない。例えばアーヴィングは英文學中の最高
 の部類に屬してゐる。」と云う。又「アーヴィングはすで
 に必讀の古典となつてゐる。そして、今後長くアーヴィ
 ングの著書を精讀することは文學教育の必要な部分と
 考へられるにちがいない。」と云う。文學教育に彼を用い
 ることはいつまでも必要であると言ふのである。たゞし
 彼は「スケッチ・ブック」一点張りについて多く語を必要は
 ない。「私はアーヴィングについて多く語る必要はない。
 諸君は皆少くとも彼の筆になる「リップ・ヴァン・ウ
 インクル」の話とその他の物をよんでゐる。しかし私は
 アーヴィングの散文に對して日本學生がなした選択は最
 善のものであつたかどうかを疑ふ。誰でも「スケッチ・ブ
 ヅク」は讀んでゐる。しかし私は、多くの人は「旅行者
 の物語」や「ウォルフ・アーツ・ルースト」や「アル・ハム
 プラ物語」と題する不思議な物語の驚くべきコレクション
 で、本物のスペインとムールの傳説に基いてはゐるが
 「アラビヤ夜話」をつくりの魅力をもつた物を読んでは
 ゐるかどうかを疑う。アーヴィングに關する考えをこれ以
 上述べた事は止めて、私は、諸君の注意を特に一つの話
 に向けたい。恐らく諸君は「リップ・ヴァン・ウィンクル」

はアーヴィングが書いたこの種の最も驚くべき物語ではないということを知らないだらう。「リップ・ヴァン・ウィンクル」よりも浦島の話にはるかによく似たものがある。そして凡ての批評家、及び一般の判断はどうあらうと、私はそれをアーヴィングの凡ての短篇小説中の最良の物であると思う。それはボルトガルの傳説に基いて「アデルンタドゥ・オヴ・ザ・セヴン・シテイズ、或は幽霊島」と名づけられている。諸君がもしまだ知らないのなら、それを讀んだら浦島の話に非常に似ているという私の考えに同意するにちがいない。

ヘルンはアーヴィングを非常に高く、むしろボー以上に買っている。ヘルンとしてはさもありそうなことである。明治年間におけるアーヴィング論としては浅野和三郎の「英文學史」(四十年)附録の「米國文學史」中のものが一番まとまつてゐる。浅野は大學の三年間、ヘルンの講筵に列し、句々珠玉をなすヘルンの名講義にすつかり魅せられた。勿論後は前記のヘルンの話もきいたにちがいない。浅野は彼の文學史の中で「スベインのスケッチ・ブック」と稱せられる「アルハンブラ」を「スケッチ・ブック」以上に見ている。

要するに日本におけるアーヴィングは、この國の變轉する文學運動ともかゝりなく、その煖爐のような暖さと、清らかなユーモアとが接する人々に言いしれぬ親しみを持たせて、(たとい賓客扱いではないにしても)皆の人から長居をすゝめられてきたところではある。

まいか。しかし、一度はこの國最大の文豪の一人鷗外も接待の禮をつくしてゐるのである。

しかし、今日では果して彼の人氣はどうであらうか。



短歌

愁　　ひ

壽　　子

求め得ぬ心ひそかに抱きつゝ、

歩み移さん秋の濱邊に

砂舟を造るゝ童等の　脊を染めて

今　赤々と陽の沈み行へ

故郷の我が思ひ出は　消えずあり

春がすすみの如　淡く冷く

「でも、すべての人を信んずる氣持で人に當れば信じる
ことが出来るのぢやないか。」

「でも、そんなの無理ね、芥川も人間心理はすぐわれないと絶望を感じて自殺したのでせう。」

「禮ちゃん、芥川の自殺に對してどう感ずる。」

二人は、この様にいつも語り合ひ、そして論じ合つてゐた。でも、そこには何か割り切れぬものがあつた。空虚なものがあるのだ。

禮子は、孤獨をそこに感じていたのだ。ふとした事から知り合ひ、そして私と云ふ人間を、そしてその心をこれほど迄、尊敬と思慕で輝かせてくれた人の様に感ずる隆志。この人に私があるのまゝの讚美を捧げることは何か私に課せられた義務の様にさえ思われるのであつた。しかし、いつしか私には理性と云ふもので、その芽ばえた感情がむしられてしまふのである。何故人間は心のありのまゝを素直に表すことが出来ないのだらう。

なぜ眞理は、それがまるでわれ／＼の前に眞理でもない様にのがれ去るのだらうと、禮子は思ふのである。

「禮ちゃん、濱邊に出よう」二人は濱邊をすずかに歩いた月がこゝろ／＼と冴へ、二人の影は海邊にぽおつとうつり、月は鏡の様にうつしとつてゐる。隆志は明日東京に歸ると云ふのである。

「そう。」と禮子はしづかに返事した。感情などからは獨立した冷靜な、そして熱情の心をどうすることも出来なかつたが、彼女の眞實が何んであらうと、彼女の理想



迷へる小羊

栗屋千鶴子

私達は理性を持つて生きなければいけない。學生にあたへられた道、それは學問の一途である。

禮子は何となし紙に書いたこの文句理想ではないが、眞實に生き様とすればここに割り切れぬものがあるのだ。しかし私はどこ迄も理想を追求して生きなければならぬ。リアリスムであつてはいけぬ、と彼女は思ふのである。禮子は高校三年、家庭的には恵まれた環境に育ち、彼女には文才があり、彼女もおりの文學に魅力を感じてゐるのであつた。

「禮ちゃん、人を信ずることが出来るかい。」と隆志に問われる。

隆志は親子二人母一人の働きでアルバイトしながら、大學に通學してゐる苦學生である。

「そうね、ときと場合においては信じられるけれど、でも、すべての人にはエゴイズムが働いてゐて、やはり信じられるのは自分一人ね。」

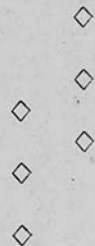
は学生であるが故に、友情と云ふきれいな花の芽とゞめらせて置くのは、彼女の理想的な彼と二人の存在であつた。隆志も何か云いたい様であつたが、二人は何も語らずしづかに歩いた。

そして別離の日もしづかに彼を送つたのであつた。それから半年、二人の友情は何と美しい青春の象徴であつたろう。

そしてそれは禮子には素晴らしい人間の可能性と深さを説明してくれるものであつた。

禮子は、隆志にいつしか烈しい思慕と執着とである、しかし理性の強い彼女にはそれを何でもないと文字でかたつけ様として今の彼女の心に、強い反省をせずにはいられないのであつた。あと一ヶ月で禮子も學校生活を終らうとして、何んとなし去り行くものに對する一抹のさびしさと、未知の世界に對する希望と慄れでいつばいである。人間は何のために生れて來たのか、彼女には青春の感傷か、人生にめざめたのか、自己にめざめたのか、時々この様な事を考へるのである。エヒリステックな考へに。幸福を求めため、一体して何になるのさ。結核は死だ。なら二度と通らぬ青春時代燃やした芽、何故摘むの。彼女は日頃の生活があまりにも甘い感傷にのみたされていゝのでないかと思ひ、それでは平凡。すべての人が通過する人生ではないかと強く考へたりするのであつた。しかし禮子は、やはりある情熱の芽がめばえて私の眞の愛情は神聖なものであり、苦しみ

つけ、喜びにつけ、決してそれは破壊しないものだと思つて見えぬ隆志に誓いたい氣持に誘われるのである。それから數ヶ月、今は隆志はこの世の人ではないのだ、肺がもとで歸らぬ人。禮子にはすべてを失つたかの様に前途が暗くなつた様な氣さへなつた。人の運命なんてわからない。何んて無情なんだろう。「隆志さん、隆志さん」呼んでみたとして歸らぬ人。彼女は泣くだけ泣いた。愛してゐたと、今靜かに思ふのである。何故、私は隆志さんに、この一言云へなかつたのであろう。それは禮子が今靜かに考へると神の名による虚偽であり、あまりにも人間性からなれて冷たく道德などと云ふ美名にかくれて、自分をあざむいてゐた様な氣がするのであつた。幾多の優美、幾多の幸福が失なわれた様な氣がし、禮子は今隆志の墓の前に、じつと目に涙をうかべ過去の姿をえがき一度大きな聲で、「隆志さん。」と呼んだ。返すはこだまばかりであつた。「何故返事してくれないの。」彼女はあまりにもあまりな、この姿に！禮子はしづかに定めなき人生に、一人さびしく進まなくてははいけなかつた。「さようなら。」花とせん香をあげてその場を去つて行つた。



戯曲

おはぎ

(一幕)

八木 佐和子

人物

祖母 お國 六十八才
息子 忠常 四十才
嫁 靜子 三十五才
孫 伊之助 十才
女中 お松 二十五才
大川 幸吉 十八才
近所の老婆 おとよ 六十五才
松本 博士 三十才

所——町から遠くはなれた片田舎の舊い地主の家

時代——現代

舞台——向つて右手に上段の座敷、それより五十センチ程低く下段の板の間が中央を占め、左手は出入り口と土間になつてゐる。

上段の座敷と下段の板の間の境には、上り下りをするために沓ぬぎ石のような形をした四角い木が置いてある。板の間にはござがしいてある。

幕が開くと、上段の座敷の右手寄りに祖母お國が厚い座ぶとんを敷いて、火鉢の前にきせるで煙草をすつて居り左手寄りに孫の伊之助が従兄の大川幸吉から數學を習つてゐる。伊之助は特に厚い座ぶとんの上にこう然と坐り、ふところ手をして胸をそらし、幸吉は座ぶとんもしかず常にへりくだつた態度で教へてゐる。下段の板の間には、嫁の靜子と女中のお松とが座ぶとんも火鉢もなしに坐り、おはぎをたくさんこしらへてゐる。

お國。(嫁の靜子に向つてきびしく)そして、なにかい。先生はどうしても、うちの坊やを級長にしては下さらないのかい。

靜子。はい、お母様、今は級長とは申しませんの。委員長長というんでございます。

お國。どつちにしたところで「長」がつく事は同じじやろう。——いつも言つてきかせる通り、この坂田家は、村でも一番の家柄じや。その坂田家の長男ともあろうものがほかの家の鼻たれ共と一しよに取扱われることは、私は、なんとしても承知できません。

靜子。でも、お母様、選挙でございますから——。

お國。おだまり！

靜子。はい。

お國。お前は何かといえは學校の肩を持つとうとするけど、この坂田家の家柄を忘れてはいけませんよ。遠い御先祖をたずねれば、清和源氏の嫡流源頼光様の御家來で、四天王の一人に數えられ、大江山の鬼退治に手

柄をたてた坂田金時様ですぞ。——しかも、その八代目に當る坂田金八様は、建久四年五月、富士の裾野の卷狩に仁田四郎忠常様が猪を退治した時、その猪の死骸を源頼朝公の御前に運んだ御ほうびに、仁田四郎様から忠常という名を頂いたお人じや。その後二十幾代の間この土地に住み、徳川幕府ごさかんの頃には御領主様に仕えて、郡奉行までつとめた家柄ではないか。——私は、學校の先生が、この坊やを呼ぶ時に、ほかの子供たちと一しよにして「伊之助——」と呼びつけにするのを聞いてさえ腹が立ちます。なぜ「坊ちやま。」と呼ばないのじやろう。なあ、靜子。

靜子。はい。

お國。三十年前、今の旦那様が學校へ行かれた頃は、先生がみんな「坊ちやま——」と呼んでいたものじや。靜子。はい。

お國。お前のように、はい——というばかりでは仕方がない。とにかく、今日は旦那様が東京から偉い博士様を連れてお歸りになるから、その博士様に頼んで、學校の先生によく言つて聞かせてもらわねばなりません。靜子。はい。

伊之助。(突然大きなあくびをして) あーあ、どうしても分らねえな。その——五に五をたしたら十になるということが……。

幸吉。それは、坊ちやま、これ御覽なさい。(片手をひろげて見せる) この手の指の数が五つあるでしとう。

て平伏する) 坊ちやま、御くろう様でございました。伊之助。うん。

お國。それでよろしい。いゝかな、幸吉、お前は家の坊やと従兄弟同士だという考えがあるので、とかく禮儀をおろそかにしていません。たとえ従兄弟同士であらうとも、坊やはこの坂田家の長男、お前は家のいそろうじや。身分というものを、よくわきまなさい。幸吉。はい、よく分りました。

お國。それでは、あつちへ行つてよろしい。(幸吉、下段の板の間に下りて、左手へ去る。)

伊之助。(突然立ち上つて兩手をひろげ大きなあくびをする。それから大聲で) あゝあ、勉強なんぞ、やつちやくねえな、おらあ! (足をどしどし——させながら右手へ去る)

おとよ。(左手から入つて来る。年よりもずつと老けてみえる。粗末な服装) 大奥様。今日は、旦那様は、まだお着きになりませんか。

お國。十時半の馬車で着くという手紙じやつたから、もうつかなければならんのじやがな。

おとよ。氣車がおくれたのでございましょうか。お國。そうかもしれん。坂田家の旦那様がお歸りになるというのに、おくれるなんて、全くけしからん汽車じやおとよ。うまさうなおはきが、たくさん出来ましたな。靜子。きよう、旦那様と御一しよに東京からおいでになる博士様は、おはきが大好物だという話なのでね。

これを二度數えてごらんなさい。十になりますから。伊之助。二度數えるのか——。おれの手でもいゝか。

幸吉。はい、よろしくございます。

伊之助。(右手をふところに入れたまゝ左手を出し、指を一本ずつ唇につけて數える。おや指からはじめて小指まで行くと、小指からくすり指に移り、おや指の方へ逆に數える) 一つ、二つ、三つ、四つ、五つ——六つ

七つ、八つ、九つ——九つにしかならねえぞ。

幸吉。坊ちやま。そういうやり方では、いけません。兩手をお出になつて、よく數えてごらんなさい。

お國。これ、幸吉。

幸吉。はい。

お國。坊やもだいたいお疲れのようじや。今日は旦那様が東京から偉い博士様を連れてお歸りになるでな、お前はこれから庭をきれいに掃除したり、風呂をたいたりしなければならぬ。——勉強のお相手は、やめてよろしい。

幸吉。それでは坊ちやま。これで終りにいたします。(そのまゝ立つて行くとする)

お國。(きびしく) 幸吉。

幸吉。はい。

お國。いく度いつても、お前には分らないのか。勉強のお相手がすんで立つて行く時、なぜ、坊やに御あいさつしないのです。

幸吉。どうも、相すみません。(伊之助の前に兩手をつい

お國。旦那様が手紙で、おはぎをたくさんこしらえておくようにと言つてよこしたのじや。

おとよ。博士様が、さぞおよろこびになる事でございましょう。

お松。おとよおばさんとこの、新吉さも、おはぎが好きだつたんでねえけ。

おとよ。んだ。うちのかつば野郎もおはぎが好きだつた——だが、お松さ、おめえどうして、それ知つてたね。

お松。たしか、おらが七つの時だつた。新吉さは、その頃小學校の五年か六年だつたかな。お彼岸にどこの家でもおはぎをこしらえているのに、おばさんの家ではこしらえなかつた。それで新吉さが、えん側にねころんで、「おはぎがほしい」と泣いていたのを、おら、まだよく覚えてる。

おとよ。(袖で涙をふく) そう——、そんなことがあつた。だがな、お松さ、あの頃はおらの家も親父に死なれて、ひどく困つていたので、おはぎどころの話ではなかつたのだ。

お國。そういえば、お前とこの新吉は、この村を出てからもう二十年近く歸つて来ないが、今一体何をしているのじや。大分家へ仕送りをするという話をきいてるが。

おとよ。はい、おかげ様でな。うちのかつば野郎も、ずい分苦勞しましたが、炭礦にやとわれて、今では坑夫の親方みたいなことをやつておりますので、大分金になりますだ。

お國。では、早く嫁を持たせなければなるまい。——うち、このお松はどうじやろうか。

お松。(思わず兩手で顔をこもる) あら、いやでございませわ。(兩手をはなすと、ほくや鼻の頭に、おはぎのあんや飯粒がついている)

静子。まあ、とんだ花嫁様だ。(手拭でお松の顔をふいてやる)

おとよ。實はな、大奥様、うちのかつば野郎も、今日十時半の馬車で歸つて来るんでございませ。

お國。あ、そうかい。道理でさつきから、お前の顔がうれしそうに見えていたよ。

おとよ。あつはつはつはつは。十八年ぶりであのかつば野郎の顔を見るんでございませから、そりや、うれしうございませとも。(そつと袖で涙をふく)

お國。無理もない。——ではな、新吉もおはぎが好きなそうじやから、家で博士様に差上げた残りを少しばかりもつて歸つてたべさせてやるがい。

おとよ。とんでもない。博士様の召し上るおはぎなど、もつたいない。

お國。昔はな、この坂田家でこしらえたおはぎは、お前たちのような身分の低い者の口には入らなかつたものじや。——まあ、新吉も久しぶりに歸つて来ることじや。一生の思い出に、坂田家のおはぎを食べさせてやるがよからう。

おとよ。もつたいない。

お松。大奥様が、あんなに御親切におつしやるで。なあ、おばさん。

お國。うん、そうじや、お松、お前新吉のところへおはぎをもつて行つてやるがい。そして、新吉の顔をよく見て来るのじや。

お松。あら、いやでございませ。(あわて、兩手で顔をこもる)。また、ほくや鼻の頭に、あんや飯粒がいつばいつく)

馬車のラッパの音が二聲、三聲きこえる。

静子。あつ、馬車がつきました。

お國。それ、お出むかえの用意じや。早く。

おとよ。(急いで出て行く)

お松。(飯粒やあんをついた顔をなでまわしながら) あ、どうすべえ。どうすべえ。

静子。私がお出むかえに行くから、お前は早く、この邊を片づけておくれ。

お松。はい。(おはぎ、あん、飯、その他器物類を急いで片づける)

静子。(出て行く)

お國。(厚い座ぶとんを二枚出して、それを上段の座敷にならべ、首をかしげて、考へては、その位置をいろいろに直している)

幸吉。(かけ込んで来る) お着きになりました。旦那様と博士様が、もうすぐおいでとございませ。

松本博士、荷物も持たずに、誰一人で入つて来る。

お國と顔を見合わせ互にしばらくは言葉もない。やがて、博士は、お國に向つていねいに顔を下げる。

松本。奥様、しばらくでございませ。

お國。(いぶかしげに) あなたは——どなたでしたかしら松本。奥様、新吉でございませ。おとよの息子の新吉でございませ。

お國。新吉——お、分つた、新吉じや。まつたく見ちがえてしまつたわい。

松本。(なおもていねいに顔を下げて) 奥様も相變らずお元氣で何よりお目出度うございませ。また母がいつもお世話様になりました。

お國。(それには答えず立つたまゝで) うん。お前のおふくろは、今までこゝにいて、お前の事をいろ／＼話していたのだが。

松本。えつ、母がこゝにおりましたか。

お國。馬車のラッパの音がした時、まつ先にとび出して行つたのだが、お前會わなかつたかな。

松本。はい、いろ／＼の人がおりましたので、つい氣がつかずに。

お國。(相手の様子をつく) とながめながら) お前は、炭礦で働いているそうじやな。

松本。はい、炭礦の仕事をしております。

お國。坑夫の親方をしているそうじやな。

松本。えつ？ 坑夫の親方？ あつはつはつ、多分、母がそう申しあげたのでしよう。あつはつはつはつは。

お國。そうやつて、身なりを立ばにしていると、坑夫の親方とは思えない。まるで、學者のようじや。

松本。あつはつはつはつは。これは恐れ入りました。

お國。今に、お前のおふくろが来るだらう。まあ、そこに腰かけて休んでゐるがい。(すわつて、たばこをすう)

忠常。(リュックサックを背負い、カバンを下げ、汗を拭き、入つて来る) お母さん、たゞ今！

お國。お歸りなさい。博士様はどうなつた。

忠常。(松本を見つけて) あ、先生、こゝにおいでございませ。

松本。いや、失禮、君が細君と親しく話をしていたんだから、おじやまをしては悪いと思つて、一足先にやつて来たよ。あつはつはつはつは。

忠常。あはははは。どうも先生には、かないません。

松本。あ、僕のカバンを持つて来てくれたね。御苦勞、そこへ置いてくれ給へ。

忠常。ええ、序に座敷まで持たせていただきます。

松本。そうか、それはすまんね。

忠常。さあ、先生、どうぞおあがりあそばして。

松本。まあ、こゝは君の家だから、君から先あがりたまへ。

忠常。それでは困ります。どうか先生から。——どれ、お靴のひもを、お解きたいましよう。(しやがんで、松本の靴のひもを解こうとする)

お國。(忠常が入つて来た時から、二人の様子を、あきれ

て眺めていたが、この時、突然叫ぶ。忠常！

忠常。（顔だけあげて）はい！

お國。お前様は、何をしていたらつしやるのです。忠常、先生の、お靴のひもを、解いてさし上げているのです。

お國。先生——。何が先生じや。氣でもくるつたのか。その男は、おとよの息子の、新吉じやあないか。

忠常。しかし、お母さん！

お國。家柄を考えなさい。家柄を——。お前様は、坂田家の当主ですぞ。

忠常。（松本に）さあ、ひもがとけました。

松本。どうも、君、そんな事をしてくれては申しわけない。

忠常。いえ、よろしいのでございます。さあ、どうぞお

あがり下さい。

松本。では失禮。（上ろうとする）

お國。これ、新吉！

松本。……。

お國。旦那様がお許しになつても、私が許しません。——

新吉、お前は、自分が、どういふ素性の人間だか忘れてしまつたのか。お前の親父は、馬方じやつた。お前のおふくろは、この間まで日雇をしていた女じや。お前ら親子は、今までこの坂田家の台所に腰かける事さえ出来なかつたのじや。

松本。（だまつて、うつむいて立つている。）

忠常。（突然暗れやかな聲で）お母さん、東京からお連れした博士様は、どこへお通し申すのですか。

お國。博士様がおいでになりましたか。それならこゝへお通し申しなさい。——さつきからこうして用意してあるのじや。さあ、こゝへお通し申しなさい。

忠常。（松本に）さあ、母もあのように申しております。どうぞおあがり下さい。（お國に向かい）——お母さん、

この方が東京からお連れした博士様です。——つまり、先日、手紙で申し上げた、えらい博士様なのです。

お國。えつ、その新吉が——

忠常。そうです。平和炭礦株式會社の顧問で、工学博士の松本新吉先生です。

お國。では、お前が東京で大變お世話になつたというのは、その人か。

忠常。そうです。お母さん。

お國。こんど、うちの山を調べて頂いて、もし、よかつたら、炭礦會社へ買取つてもらふようにお世話をお願いしなければならぬというのは、その人か。

忠常。そうです。もしも、あの山が賣れなかつたら、坂田家も破産です。坂田家は、そこまで行きつまつてゐるのです。だから私は、これまでさんく——お世話になつた松本博士に、同郷のよしみで、特にお願ひして今度東京からおつれ申したのです。

お國。あゝそうだったのか。私は、とんだ事を云つてしまつた。忠常、私は一体どうしたら、よからう。

松本。奥様、御心配下さいませ。奥様の家柄を大切になさる御氣持は私にもよく分ります。

忠常。しかし、家柄よりも大切なのは、個人の人格や能力です。自分の家柄ばかり誇つて、そのために他人の人格を傷つけたり、立派な學識や能力のある人を尊敬しなかつたりするのは、はなはだしい封建主義です。

お國。（松本に近づき、手をとつて）さあ、こちらへ上つて下さい。

忠常。さあ、先生、どうぞ。（松本の靴をぬがせ、腰を押したりなどする。）

松本。いや、あがります。

松本は、お國や忠常に導かれて、上段の座敷にすわる。お國、忠常もそこにすわり、あらためて、ていねいにあいさつなどする。

靜子とお松が、カバン、風呂敷包など持つて少し前から土間にあらわれていたが、この時急いで下段の板の間に上り、大きな皿に山盛りにしたおはぎを出して松本博士の前におく。

松本。いや、これは——、どうもごちそうさま。

おとよ。（入つて来て獨りごと）うちのかつば野郎は、いくら探してもいない。

松本。（おとよを見て）あつ、お母さん。新吉はこゝにいます。

おとよ。なに、お、お前はたしかにうちのか、か、かつば野郎——様

松本。（立つて行つて、おとよの手を握る）お母さん、新吉が歸つて來ました。これから、お母さんに、もつと樂をさせますよ。

忠常。さあ、先生のお母さんも、こゝへ上つて、一しよにおはぎを食べて下さい。

お國。それじや——。こゝへ來て、博士様の大きなおはぎを一しよに食べて下され。

松本。さあ、お母さん。（おとよを抱くようにして、座敷に導く。）……幕……

俳句

旅

中島秀子

友病みて 波さわ／＼と旅の夜

小雨つゝ 海面暮れゆき旅づかれ

峠バス のぼりくだりの客の笑み

秋

きりたちし 岩みあぐるや瀧しぶき

くり一つ うづまく水にのまれけり

風鈴ゆれて やみにかすかな笛の音

秋 空

照 子

こ の 美

白雲への斷想

底知れず澄みし私空の下に
 眼を上げて木の葉食む
 若き馬よ
 かけられた首の縄は
 おまへの夢を現實の世界に
 引きせばめるが
 ほら
 おまへのそのあどけなき瞳には
 空を行く
 白雲が寫っている

白い雲
 青空に、浮かびて消える
 白い雲、なつかしい匂いのする
 お前は、何も云わない、でも
 青空、みどりの山々
 静かな風景の中で何かを
 無言のまゝ、さゝやきかける
 無言で昔あるからこそ
 お前は美しいのだ。
 お前がなつかしいのだ。
 白い雲、時が流れる様に
 お前も去つて行く
 どこへ行くのか、どこへ
 限らない空間をさまよい
 何を求めてか
 ついには、水の泡の如く消えるとも
 お前は、永遠に何かを求めて、
 限らない空間をさまようであらう。

落 陽 の 美

— 十和田湖にて —

中 西 一 路

エメラルドとネーブルスの 青き深き虚空
 山頂にかゝる ネズミ色の雲層
 上層に輝く 黄金色とバーミリオンの一流れ
 落日はまわる。
 きらめく一直光線は他の光線と平行直交し
 白雲を次々におかして波に映ず

あゝ孔雀舞ひ狂う美のしゆんかん
 島は青く濃き紫色にはやくもねむりにつかんとする時
 風は徐々に起り
 木々の葉はさやぎうたいさけび
 波はくだけて砂石にブロンズのあわを吹く
 あゝ莊嚴なる蒼色。

旅の日

奥崎 馨

「ねえ、先生こつちへいらつしやいよ。」にこにこ笑ひ乍ら、ハンカチを持った手を振り上げて呼んでいるのは葉子である。先生、例の通り、ボサ／＼やつて行く。「自動シャッターつて便利ね」と言つて、一人含み笑ひを作つた。葉子は先生を迎へて、ボートの横で適当なポーズを先生に作らせ、「いいでせう」と言う。彼はそのまゝ、葉子の注文を受け入れている。「お嬢さんは甘えつこだな」と言つて、いつか可愛らしくにられた事がある。ふつとそんな事を思ひ出した。

「先生つてあまり笑わないのね」と言つて、彼の横に小歩にかけて来て坐つた。

嫌だと思へば、その場を逃げ出す事が可能である、が別に氣にもかけなくとも良しいだらうと、一人辯解した。

☆ ☆ ☆

昨年の夏の山遊びの時、終始葉子と共に、行動し、話を交した事に依つて非常な噂の、眞唯中に置かれた。当の葉子は致つて平氣平穩であつた。したがつてその後も幾度か彼のを訪れて居た。

先生を友達になつて言うのは、全く失禮かも知れないが何でも話す事の出来る最良の友達であつて欲しい。本當のお兄様のような氣がするの、といつか彼に言う様になつていた。成る程葉子には兄弟も姉妹もない親子だけの生活だつた。

夏山に遊びに行つたのはその頃であつた。朝起きて、一人牧場の方を散歩したり、あるいは彼を誘つて肩を並べて山道に入つたりした。眞赤に熟した野いちごが彼等の手によつて取られて行つた。

誰もが胸に夢を秘めてゐる様な、そして楽しそうな山での月日だつた。

その秋早く、彼は結婚した。葉子に一齊注目して女學生はさへずり出した。宣傳係りも大變ないきおいで、のり出したが、しかし彼女等の予想を他に葉子は少しも動じた色をみせなかつた。彼の妻として生活に供すべき人を、葉子は同じ先生についてお茶とお花を習つて居たから良く知つていた。

葉子も成績の方は、ずば抜けて良いとまでは行かなくとも順調な成績の進みぶりをみせていた。まだ勉強欲は出ないらしく、大學まで進もうとは思つて居ない。それより彼女は彼女なりの生活に満足してゐた。

お茶、お花、お琴、これらはみな、母親の希望の嫁入り道具であらう。裕福なる家庭の子女は、幸福なるものである。思ひ通りのおけい古事が出来る。葉子も一おうの嫁入り道具を習い又趣味として美術、音楽を楽しむ事

女學生は特にうるさいものである。何かと言へばすぐ噂をまき散らし、事を大きくするものである。それ等のグループは、女學生間に於いてやゝ、認められたような形の存在であつて、宣傳係とか言う名を與えられてゐるのである。

彼が、女學校の教師たらんとして門をくゞつた時、第一番に目についたのが葉子であつたと云へよう。大變なる美人でもない、目立程浮き上つた存在でもない。がやはりどこか自立つ所があるのであらう。

多くの人を一ヶ所に集めて、それ等の人達を一渡り見渡す事のできる位置に立つた時、誰でもそこに一、二人の目がつくのである。特に女學生等はそうである。しかしそれとて、美人であるとかあまりにも太つてゐるとか言ふ件に於てではない。したがつて彼の目に入つたのが、お嬢さま育ちの葉子の姿だつたのである。

それから間もなく、彼に依つて、お好みサークルなるものが校内に初めて生れた時、まず第一に彼が大學出の青年である事が非常な魅力だつたに違ひない。したがつて、文學好みの女學生、映画好みの女學生が、嬉々としてその會員となる事を申し出た。

この會を設けた事によつて、例の女學生が、葉子である事を彼は始めて知つたのである。確かに彼女は生活様式が派手であつたから、何でも一通りは知つて居た。だから彼にしてみれば、一番話の合う女學生には違ひなかつた。

を忘れては居らない。ぜい澤な洋間を自分の部屋として電着を掛けて、音楽の鑑賞をし、又床間のついた純日本風の部屋に於ては、美しい衣服に着變へてお茶を習うのである。又彼女は、自分自身の容貌には自信を持つて居た。素晴らしい夢を持つて居たから、自分の生活にとり入る事、不可能ではなかつた。

彼の結婚後も、相變らず葉子の姿は見た。度重なるにつれて、一つの家庭に納まつた二人のかもしれない出づる氣になつて、何かしらなじめないものを感ずるやうになつて来た。先生の妻君良子は、全々知らない彼と結婚した譯である。この事は、彼の東大出が魅力で結婚したと言ふ事を幾度か行き來する内に葉子は悟つた。

秋もふかくなつて、たくさん植木も、すつかり葉を落してしまい、寒そうにその枝先までが見える夕方、彼は宿直に當つて居つたので、ぼんやり研究室の窓から向ふを眺めるともなく眺めて居た。おそらくはもう校舎に誰も居ない事であらう。職員達もう退けた後なので、晝間のにぎやかさには較べられない静けさで森と静まりかへつてゐる。

彼は、まるで時間が過ぎて行くと言ふ事を、知らないかのようにぼうつとした氣持で立つて居た。いつまでもそうしてゐる事は出来ないで各校舎をみてまわつてから、「ひまなんだな」と思つて、又廊下に立つた。

人が来る氣配も感じなかつたのであるが、その内彼は誰かの冷たい手で目かくしをされた。ふりかへつてみた時

そこに居たのは菓子である。「つめたいでしょ」と言つて、あとの言葉はのんでしまつて言わなかつた。
「先生、今日当直ですつてね、田中先生に教わつたの」手をぶら／＼やり乍ら菓子は彼の前に立つて居た。「うーん」と言つたまゝ、さつき向ふを眺めて居た時と同じように、菓子の顔を眺めた。しかし焦点は合つて居なかつた。その夜、おそくなつて菓子の店の若者が迎いに來る迄、彼と遊び過ぎた。

おつてすぐこの事は、宣傳係の活躍に依つて女學生達に知れ渡つた。

彼の妻君も妙な感じを受けるらしかつた。あまり明るい顔もしない彼が、菓子の訪問を受けた時は大がいに氣嫌がよいのである。これも氣のせいかも知れないと思つてみるが、やはり割切れない事は確かであつた。

次の当直の時、小使が彼の研究室をノックした。風呂敷包をだまつて渡して行つてしまつた。誰が何を持つて來たのだらうと、變な氣持でといてみると彼の好物のチョコレートとあめ菓子が入つて居た。その後も度々そんな事がくりかへされた。ある時は「奥様にもあげて下さい」と紙片にかかれてあつた。だん／＼菓子の顔は研究室にみられなくなつて來た。そうなるに授業の他にはほとんど合う時がなかつた。したがつて自然に宣傳係からも見のがせる様になつた。

☆☆☆

合評會のお知らせ

十月二十七日(土)あかる四十周年記念號(第六號)の合評會を午前九時より行いますから、六十一番教室に御集り下さい。



「氣違の部屋」

法 子

「おい、お前はいつもだらしないな。もう少し男らしくしろよ。」

私は、今日もこうして橋本を叱り飛ばしながら、小さかつた頃の自分を思い出した。丁度小學三年の頃だ。四人兄弟の一番末子に生れた私は、祖父母や父母の愛を一手に受けて育つたので、我儘で、腕白な子であつた。その日は町長さんが來るので、家の者が皆私をかまつてくれない。そこで、母が丹念に磨く廊下に、黄色のクレヨンで太く何度もなでながら「ばかやろ。」と誰にともなく書いた。

「何してんだい。トシ坊。」

小學六年になるすぐ上の兄が、ガパンを持つたまゝやつて來て、私が盛んに隠そうとするのを無理に覗き込んで、いきなり殴りとばした。私はいつもの調子で鋭く睨みながら、大聲を張り上げて台所の母の許へ走つて行つた。

「お前は、何と云うことをしたんでしよう。今日は偉い人達が澤山來るんですよ。困つた子だこと。あつちへ行つてらつしやい。フミ、早く雑巾を持つて、早く／＼。」叫びながら廊下へ走つて行つた。いつもなら、「もうしな

「去年のように楽しく遊べると思つたら、今度の旅は案外つまらなかつたわ、先生までいつも「む」となさつてらつしやるし、美ちゃんや喜代子さんに取られちゃうし、本當よ、こんな素晴らしい所へ來たのに」

菓子はカメラをケースにおさめて、肩にかけた。その度姿をみて、ずい分變つたなと思つて彼はながめた。まだ／＼變るんだらうと思ひ乍ら歩調を合せた。

「いわけ」と云つてお菓子をくれたりする母であつたが、今日は私の手をびしや／＼と叩いた恐ろしい顔を思出し、盗坊に追かけられでもした様に、一目散に祖母の家の方へ走つていつた。その晩、私を一番愛してくれた母は腦溢血で倒れ永眠してしまつたのでした。あまりにも突然で、目の邊りに死のはかなきを見た私は、子供心にもあの母とフミが消そうとしたうす赤くなつた廊下を誰一のものなごりとしてながめながら、人生と云う様なものを、しみ／＼と感じたのでした。そして、最後迄、苦しみ通した自分を考え、そのいやな思い出を忘れようと、ひたすらに本に接し、憂鬱な少年に育つてしまひました。あれから十年も過ぎ、家を離れて、この日大學に籍を置きともすればその思い出も忘れがちになつていたのであつた。それが、今度轉校して來た、む／＼つりと憂鬱そうな橋本を見ると、又、ふうつと、寂しかつた少年時代が、まざ／＼とよみがえつて來、どうしようもないいら／＼した氣分にさせられるのでした。ことに、彼と部屋が一緒になつてからわ、一日中、そして毎日、彼の目をつむつてじつとしてゐる姿をながめると、脱兎の如く、帽子もかぶらずに、酒を飲みながら、賑やかな町を徘徊ふのであつた。「氣違の部屋」これは私達が寮生に貰つたあだ名である。橋本のむつりした顔を見ると、狂つた様にどんなやん驚き始める山下と大内、それと一緒に跳び出す山田と私。……こうして、この不思議な力を持つ橋本と私は、いつ頃からか、反目する仲となつていたのです。

「高橋、外へ出ろ。」
いつもの様に酒を飲みに行つて来た私は、喘ぎ／＼叫んだ。ひや汗が二筋、脇の下を流れて行つた。

「うむ。」
不気味な唸り聲を後に、私は暗い庭へ跳し出し、向い合つた途端、二つの身体は組合つていた。

「畜生、／＼。」
十年間、ぶす／＼と憂鬱の中に打消されていたものが、一度に盛上つた様に、私の心と手は、火達磨になつて燃え狂つた。どの位、過ぎてからか、私は、草の上にころがつている二つの人間を見出したのでした。静かな秋の夜でした。私の心は徐々に、理性に返り、自責の念に打たれるのであつた。橋本に何の罪があるのか。

「橋本。」
がつちりと握り合つた手を、斜いに光が流れ、苦悩に歪んだ頬を、冷い微風が撫でて行つた。

その時から、私達は親友となつたのである。しかし、依然として「狂いの部屋」に變りわな／＼、苦い顔をした連中ばかりだつた。そんな彼が二度も自殺をもくろみ、静養してゐるのである。ある日私はF病院へ誘ひに行つた。

「君、散歩に行こう。」

そして、私はH大學の傍を流れてる大川のほとりで、始めて彼の身の上を知つたのであつた。

「僕の苦い生活は十八の時から始まる。その全てを母に

もうひけ時のバーに入つて、胸が裂ける程、飲み上げたのであるが、ます／＼憂鬱になつてしまふのだつた。

「君、親友の誼みを持つて、俺の後仕末頼むぞ、そんな顔止めろよ。あは／＼。」

「馬鹿を云へ、お前なんか死ねるもんか、まあいゝさ。」

私は彼の言を冗談と聞流し、とろんとした目でさぐる様に彼を見やつた。

「君、俺の一番好きな歌を聞して上げるからな。

妻をめとらば才たけて

見めうるわしく、情ある

……

こんな夢もあるけど——だ。」

幾分よひの廻つた身体で静まり返つた町をねり歩いたその晩、彼は自殺をした。彼の好きな歌も夢だけに終つてしまつた。彼の身体も、そして彼を苦しめた悪魔も消えてしまつたのだつた。私は彼の冷い身体に触れながら、古い想い出が遠のいて行くのを感じた。

責任がある。今の母は後妻だ。きつと父の職業に引張ら

れたのだらう。僕は四才の時、兄二人と母に死別れ、その兄も、戦争で死んでしまひ、父さへ、土木の疑獄事件に關係して留置所に居る。僕が家に歸ると、繼母は云うんだ。「お前の父は罪人なんだよ。お前は罪人の子なんだ。私はその罪人の爲に一生を無駄にしたんですよ。だからお前は、私を保護する義務があるんだ。」とね。若い顔して泣きつくんだ……。そんな事何でもない、僕はもつと／＼大きな事を知つたんだから……。君、僕は聞いたんだ。暗い小さな部屋で、背が低くて、やせていて、變に目ばかり凄く大きい女に……。「お前の母は自殺をしたんだ」と。

君、父は罪人じゃないんだ。悪魔が悪いんだよ。悪魔が、母を殺した悪魔がね。だから、僕は父が罪人と思わないんだ。やがてきつと、父も自殺をするだろう。君僕が自殺をするのは、罪人の子だと云われるからでわな

いんだ。母を死に引ずり込んだ悪魔が俺を誘うんだ。僕は呪われているんだ。僕が世界の果へ行こうと、海の中に沈もうと、俺は永久に呪われるんだ。」

彼の目が異様に光り、氣のせいかわ彼の姿がふるえてゐる様に思はれた。月の光で、川の面が輝き、この小さな二つの姿を寫してゐた。

「橋本、酒でも飲もう。」

私はこのまゝ、五分も過ぎれば、自分迄が悪魔に誘われてしまふ様な恐怖にかられ、酒の暖みで心を落着けようとした。

俳句

初夏

壽子

童らの姿小さき初夏の山

夕やけに手をかざしみる夏の山

中西一路

夏の十和田湖

碧水にうつして屏風岩かげり

遊涼船のみなわにそうて烏帽子岩

杉子

夕暮

驛にまつ夕暮れ淋し五月雨



記日想回

田 津

七月三十一日～八月一日

中天を流れる銀河の下、夏の宵のざわめきを後に、私達をのせた満員の急行列車は野の闇を縫い、北へくぐりと進んだ。息苦しい車中の妖氣に酔って微睡事幾多。窓外に見えるものは悪魔のころもをひろげた様な濃い紫の闇ばかり。黄金の星影二つ三つ。北へ——二本のレールがつづいていく。北へ行くにしたがつて窓硝子のすきまから涼しい風が吹き込んでくる。乗車する人々の言葉はなまりがあつて面白い。幾度となく時計を見る。あくびが出る。けたたましいにはとりの聲に東の空はしら／＼と明け行き、四方の山々に朝の輝が見える。美しい青森の海岸をながめて、十時間の長い汽車の旅は終つた。

まだ十分復興しきれぬ青森の驛前より心快いロマンスカーにゆられ、案内嬢のソプラノの聲に耳をかたむけ流れ行く街を見た。果物屋の軒先には青いりんごが山とみかさねてあつた。目の前にひろがる八甲田山を七連り八連りして青森の街の見下せる山頂に登りつめた。海拔千五百餘米。なだらかな山並を八方にながめて高原にバスをとめた。山小屋の井戸よりのどをうるおす。水の様なつめたい水をくんだ。高原にたわむれる馬の群。めずらしい高山植物を採集した。小さな虫を取りつけた。「もうせんごけ」黒い實をつけた「まいする草」静けさを思わす「まんねんすき」これらの種々の植物は高原にいる喜びをます。自動車は彼の全動力を用いてすぐ急な坂をのぼる。一歩足をふみはずせば何百丈の絶壁。私達は生命を運轉士に身体を自動車に託して雲なほ低い八甲田山の山路を登つた。残る傳説は悲しい。萬沼のほとり。「萬温泉」とかゝれたしらかばの木片。高原らしい情緒が今なほ目前を去らない。身にせまる冷氣はむし熱い、平への道のりを速くする。明治の文豪大町柱月の墓は萬を訪れる人々を神れいを得てみちびく。誰がそえたのか一輪の野の花が……。あわいむらさきの「野あじさい」がいたるところ咲き

みだれ、高原に憩ふ人々の目を樂ませている。赤トンボを追ひめぐり童心への想いを深めた。旅行第一日はかくの如く暮れた。疲れた身体を床へ、心をば夢路へと宿獨特のせんべいぶとんにくるまつた。

八月二日

流れる水の音にききなれぬ小鳥の聲を夢うつゝに聞いた。手がこごえるばかりの冷水で洗顔した。かんづめだけをかこんでの朝食は風變りて楽しい。朝から湯浴みした。朝の空氣は冷しすぎる。室内に於てトランプをして遊んだ。再び私達はバスの中の人物となつた。緑のトンネルを通り奥入瀬の川邊をバスにゆられた。道の兩側には美しいみごとな瀧が幾十かあつた。白糸の瀧、姉妹瀧とか案内嬢の聲を消す大きな瀧の音。木の間がぐれに碧い水面がのぞかれる。それこそ夢に見た十和田湖である。船つき場「子の口」をあとにバスは湖のほりを行く。海拔八百五十米餘、岸邊の緑が湖面にうつり云えつくせぬ碧さと美しさを保っている。山並を離れて平原を砂ぼこりと共にバスは湖畔の街休屋に到着。「一ぶく」に宿をとつた。夕やみの湖畔を散歩した。繪に見る様な小鳥が幾つか見える。沖にボートが見える。

八月三日

氣がついた時、もはや私は湖上の人、一つの島をめぐるのと又向うに一つ。エビス大黒島とか、グミ島とか……。トランプ占が大はやり。街中の商店を一めぐり、街といつても本當に小さい。どの店も同じ物が並んでいる。繪はがきと切手を求める。夜のボートは氣持がよい。宿の灯が水面にうつる。姿見えず、ただ聲だけ聞える。静寂な夜の訪れと共に故郷への哀愁がわく。恋しい人々へ湖畔の便りを書く。皆一室に集つて電燈を消し、先生から怪談を聞いた。ひめいをあげ、思はず隣人にしがみついた。窓硝子を通して輝く星が見える。あ！流れ星が！星の流れている間に願ひ事をするとかなふとか。じつと夜空を見上げた。が、待つ時は流れない。ボートに乗り湖で顔を洗つた。ゆれながらおそろしく洗ふところに通常味わえぬうま味があつた。遊覧船で湖上よりの風景をたゝえた。水中に足をつき込み歌をうたつた。廣々とした美しい湖上。いつまでも湖上の人でありたい。子の口の浅せの岩の上でおにぎりをつた。御飯を水中へ入れてやると、えびが集まつて来てどこかへもつていつた。無中で魚をすくつた。晝食だけの簡単な持物で遊びに來たので故郷を遠

く離れている様な気がしない。愉快に遊んで楽しい想
い出とした。休屋へ歸つてボートにのつた。

ある貸ボート屋のおじさんが「貴方達の様にボートの
好きな方は、私が商賣始めてから十年位になりますが、
見た事ありませんよ。」などと私達の事を云つていた様
に、私達の小使は殆んどボート代に消費された。宵待
草の花が咲いていた。バスで知り會つた人々のキャン
プ小屋へ行つた。キャンブファイヤーを圍んで何やら
話していた。私達も仲間へ入つたが、言葉が通じない。
弘前市の方達だそうだが、津輕辯で話す。通譯を通し
て各々の地方の話をした。休屋のバチンコ屋には「未
成年者にはたばこをあげません」と書いてある。大人
も小人もばちん／＼楽しそう。平では出来ない。一度
して見たいと思つていたので入り込んだ。ばちん／＼。
面白くてやめられない。
今夜は月も星もない。
恋しい故郷の夢を見ますよう。

八月四日

水面に無數の輪をえがく雨。

楽しみだつた湖上洗顔はおじやんになつた。

誰かが雨の中をかきさしでかけだして行く。

雨の日の十和田は淋しい。

いつしか小雨も晴れた。いつになく湖上は荒れ狂つて
いる。湖上のボートは木の葉の様。

休屋最後の日ボートに乗れないなんて、楽しかつた十
和田の想い出がくずれそう。
十和田名産「ひめます」を朝食にたべた。
街角の商店へ入つていつた。下手な繪や字をひねりま
わしてせものを書く。それをやいてもらふ。寄書は
趣向があつて面白い。休屋名物の樂焼である。店のい
すにすわりこみわい／＼がや／＼、すこぶる店頭はに
ぎやかだ。これにつられて客が足をふみ込む、いずれ
も雨あがりだ。いくつな人々である。
こんもり茂げる杉森に赤ぬりのさびた十和田神社があ
つた。自然の岩の階段をのびり神社の裏の占場へ行つ
た。七十段からの鐵はしごをたどりこん碧の湖へおり
た。はん紙をかんじよりにして、心に占事を念じなが
ら水中へおとす。沈み方によつて吉とか何んとかと決
める。水中の紙をみつめる。深刻な顔、もしわるかつ
たら……。心のどうきをおさえて沈み行く紙をみつめ
る。占場にはいつも神秘的な空気がたゞよつてゐる。

――終り――



マチスと十和田湖

富澤有爲男

この春、マチスの展覧會があつたとき、私は五年振りに
病休を押して、上京しようと云う考へになつた。マチ
スならそれだけの値打ちが、充分あると思へたからであ
る。私がマチスの繪に初めて接したのは、もう三十年も
前になる。大原のコレクションで、それを見たのだつた。
その時は、別に何んとも思わなかつたが、その後バリへ
行つて、次第にマチスの繪に接する機會が多くなつた。
大概の美術館には、必ずマチスの繪が並べられていた
し、画商のペルネーム・ジュンのギャラリーでは、殊に有
名な個人展があつた。

初めて私がマチスに感心したのは、その時である。マ
チスは画面の計算にかけては、まさに古今獨歩の人だと思
つた。それは、画面に於ける高等数学の様なものだが、
しかし、數學では割り切れない生き物の姿を、ちゃんと
描き出しているのである。繪でも文學でも、本當の難し
さはそこにある。マチスの画家として占める位置は、十

九世紀の巨大な画家達に較べても、そう云う点で彼等の
寄りつかなくなつた世界へ、辿り着いていると思つた。や
つぱり、二十世紀にならなければ出なかつた画家だとも
云い得る。

それで、マチスの展覧會だけは、子供達にも一度見せ
ておく必要があると思つた。例へ今見て何んの感動がな
くとも、將來その記憶を呼び起すだけで充分だと考へた
からである。それで、私自身はとう／＼行けなかつたが、
上の方の三人の子供達には、それ／＼上京させてやつた。
「きれいだつたわ」

歸つて來てから、たつたそれだけの感想しか述べ得れ
ない子供達だつたが、私はひろんそれだけで結構だと思
つた。

その後夏になつて、次女は磐女の文学グループの人達
と一緒に、十和田湖の旅行に出かけてもいいでしょう
かと訊いた。

「ああ、よろしい。あの景色だけは見て來るがいい」

私は、マチスの展覧會と同様に、十和田湖の風景を是非
子供達には見せたいものだと思つた。映画を観るのもし
いし、小説を読むのもしいい。展覧會へ行くのも悪くはな
いが、美しい風景を見るのは、それよりももっと大切で
ある。自分の住んでいる地上が、どんなに美しい處であ
るかを知るのは、何にもまして尊い事である。むろん十
和田湖に行かなくとも、地上の美しさは、三尺の庭にも
満ち満ちている。しかし、人がそれを覺る様になるまで

には、相當の年數と長い休養を加へねばならない。それをいきなり若い人達に要求したつて、無理と云うものだ。やはり出来るだけ初めは代表的な美しい風景を見せ、それから順次に自然を見る眼を養つてやらなければならぬ。

次女は十和田湖を見て来て、これもまたマチスの場合と同じように、

「きれいだったわ。」

と、その感動を洩らしたばかりである。だが私は彼女の心の中に、自然の美しさがはつきりと位置を占めたただけでも、よいと思つてゐる。

私が十和田に行つたのは、秋の初めである。私の場合、十和田湖よりむしろ八甲田の麓から、葛、奥入瀬へかけての紅葉に心を衝たれたが、次女達は、あの色彩の洪水も知らずに歸つて来た。だが、それで充分である。人間の一番賢明な生き方は、この世の中を美しい楽しい所だと思ひ込めるか、どうかにある。



和歌

みどり

夕霧に包まれつつもこぎ行けば

遙かなたに 友の呼ぶ聲

中西 一路

十和田湖

横波のしぶきをあびて娘等さわぐ

こゝ中の湖の島かけを航く

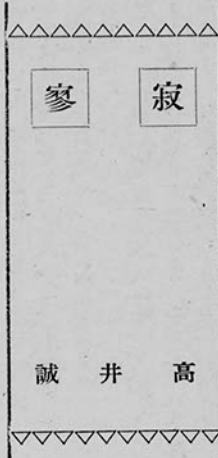
この青は我が愛づる青深き青

吾が生涯のいろどりの青

(昭和二十六年七月二十七日の旅)

明子は、落ちつかぬ氣持で、四、五日を送つた末、やはりもう一度、片岡に會つておく事に決心した。結婚とゆう事が、どうにもならない確実さで、一日、一日と近づいて来るのを、明子は身のおきどころもない模様で、そわ／＼と、感情の平衡を缺いて過して来た。もとより明子は、家の者にはその様なあせりを、感じとられぬように、終日、注意していたが、家の者が、明子の様子に氣づいたとしても、誰も特別に氣をつける者もなかつた。結婚を目前にひかへた、娘のごくあたり前の、心理状態ぐらいに思つていた。

父母が主になつて進められていた縁談が、いよいよ本きまりになり、北村家の、末娘である明子が、他家へ嫁ぐ事になつたのである。明子の父親、北村氏は、植物學者として、三十年も地味な研究に没頭してきた人で、その温和な人柄は、弟子達にも受けがよく、彼らは、師の北村氏を信頼すると共に、圓滿で、進歩的なその家庭に、



親しみを寄せていた。北村氏は、何年も前から、唯一の心痛の原因であつた末娘の縁談が、めでたく實を結んだ事に對して、しごく満足しきつて、長男や、姉娘達の時と同じように、新居をかざる植木造りに、餘念がなかつた。しかし今、明子の心に、さし迫つた、乙女時代の淡い感傷のようなものが、弱々しく、くすぶつてゐるとゆう事實に、誰も氣づかないでしまつた。が、これは當事者以外には、誰も知るよしもない事で、明子が、片岡と知り合つてから、二人の間にほのかに燃えつゞけていた愛情が、いつか幼い彼らの手で、たちきれそうな状態のまゝ、今日まで、つゞいてゐるのである。

片岡は、大學を出ると家人や、多くの人の、期待を、裏切つて小學校の教員として、入つたまゝ、爾來十年近くも、榮達を、ねらう先輩や、友人をしりめに、何の野心もなく、小學校に通いつゞけた。

明子は、そうした片岡の態度に、あたりどころのない焦燥に苦しみ、何度も結婚を迫つたが、その度に、片岡は予期しなかつた一大事を、もちこまれたように、逃げ腰になるのだつた。明子は、いつになつても要領の得ない片岡に向つて、身を固くしてたづねた事がある。

「何のかのといつても、片岡さんも、恋愛を享樂するアプレグループの一人なのね。」

海岸のまがりくねつた、松林の中にある、細い道を、自分の前に立つて歩いてゆく、明子の言葉を、聞いて、片岡は、明子の語尾を、もぎとるように語をつよめた。

「なに、僕がアブレグールブの一人だつて！」

「そうでしょう結局、私には一定の愛情を注ぎ乍ら、決してそれ以上の事をしようとはしない——」明子は見ようによつては、高まんに見える、とがつた鼻を、片岡の顔にまっ直に向けて、まともに彼を見すえた。

「僕は泰然としているわけではないけど、時期をみているのです。今の僕の状態では、貴女のお父様のような偉大な学者のお嬢さまと、結婚したいなんて、とても云へないよ。僕は小學校の平教員だから……」

「小學校の教員が、學者の娘と、結婚出来ないという理由がどこにありますかしら。」

明子は家庭でのがまゝな調子で云う。

今日は、何がなんでも、片岡から、實のある返答を得ようとする、強い氣構があつた。

「それは一般論さ、實際には、そうはいかない。それに僕は、まだそんな自信はないし——」片岡は曖昧に語をにぎした。彼としては、こういう小さな論争が、あるたびに、責任上、弱氣にならざるを得ないのだ。

「その事はもう何度も、聞きました。片岡さんが、立派な童話をお書きになつて、世に認められてからとゆうのでしよう。」

明子の強い調子に、おされて、片岡は素直に、うなづくより外に、仕様をしらなかつた。明子の、強硬な心を表すように、夏の木もれ陽が、彼女の白い脚に光つた。

「でも、経済的にも安定してからとゆうのが、片岡さん

のご意見でしたけど、片岡さんのように、俗事をけいべ

つしたがる、性質の方に、とてもそんな事、望めませんわ——それは、御自分でもお気づきのことでしょうが」

明子の精一ぱいの、抗けきを聞きながら、片岡は、安易な氣持でいるうちに、こんなにも重い責任が、自身にのしかかつているのに氣がついて、暗い氣持になつて

いた。

「何も世の中のことを、けいべつしているのと、ゆうわけはないけど、僕には、今のところ、これ以上のことをする能力がないから。」

明子は硬ばつた表情で、あおざめていつた。

「私、そんな云い方をされるよりは、はつきりと、片岡さんは、私を欲していないのだと、云つていたという方が、よろしいのですわ——いつまでもそんなふうに逃げ

てしまわれるなんて……」

明子は初めて、めざめた氣持で、ぼう然とした。今までの強い氣構が、小さな、すき間風が、入りこんだしゆん間に、無残に、くづれおとされたのだ。

明子は、今さらのように、自分の弱さを感じさせられた。ずつと以前から、胸にうづいていたような、寂寥が、一ぱいに廣がつて心をおもつた。

「いや、僕はそんなことをいつているのでは、ありません。僕は、明子さんを、きらいになるなんて、考えたこともないのですから——」

「いえ、もうよくわかりました。」

「明子さん、あなたは間違つて——」明子はその様な片岡の態度にきらりと眼を光らせた。

片岡は、自分の心を掘り上げて見れば、なんのかのといつても、結局、明子を強く欲しているわけではなかつたことに氣がついてた。明子の父親の北村氏が、心に描いている、理想とは、自分とはあまりにも、違いすぎることを感じていた。明子が以前、一緒に散歩した時、いたづらばく、それとなく父の好みを、ほのめかしたことがある。

「父は、私の結婚する相手が、まず健康であること、身共によ。経済的に多少のゆとりのあること。手腕のある人——を望んでいるのよ、どう、片岡さんは、父を喜ばせるような方になつてくださる？」

「どうやら僕は、明子さんのお父様の、お好みの型には縁遠いね。」

「いゝのよ、ほんととは、そんなこと。片岡さんは、とても父のお好みどおりになれないですもの。唯、父は私が幸福になりさえすれば、満足なのよ。だから、このような結婚の問題になると、いつも近代的な思想をほこりにしている父が、妙に封建的になるのよ。」

明子はどんな時でも、片岡を信頼しきつてた。片岡はそれを心苦しく思いながらも、なにか心のあたゝまる感じがするのだつた。

だから片岡は、その時も、明子との結婚の困難を感じながらも、明子と一しよに、前途に希望を持つていた。

片岡が、明子に心がひかれたのは、明子が小さな眞實を持つている所以であつた。片岡はその頃、學生氣分のぬけぬえに、見えすいた、からくりの多い世の中に憤慨し、眞實に生きようとした。だから、片岡にとつて、明子は、彼の心の寄りどころであり、魅力であつた。しかし年と共に、片岡の考えも變つて來た。片岡は、明子と結婚することによつて、北村氏や周囲の、不興を買い、何者をも失つて、明子一人を、とゆう程は、明子を欲する氣持はなかつた。

片岡は、以前心がけた、兒童文學への、夢を捨てきれずにいたし、それを、自分が満足出来るように書けるのは、何年後のことか見通しもつかぬ今、片岡には、現在の職業や、環境とゆうものを、かる／＼しく、取り扱うことは出来なかつた。

片岡は、自分がこんなにも打算的になつたことを、明子に恥じてはいたが、明子が變らぬ愛情で、自分を信じていることをしつて、氣の毒に思つたりしても、決してそれ以上のことをしようとはしなかつた。

明子は、片岡と一緒にいるかぎり、どんな時も暖かい氣持で過ごすことが出来た。

一緒に歌い、笑い、そして片岡が、兒童心理学に、首をつゝこんで眞剣に追究している時は、一緒に考え、片岡が情熱の赴くまゝに、行動しようとする時は、適度に抑制する役目もした。この様なことは、いかにも楽しい事ではあつたが、二人には、とうていこれで満足する

気にはなれなかつた。明子は、片岡の態度を、不安をもつて眺めたが、うたがうことの知らぬ明子は、片岡の心底をみぬくことは出来なかつたのだ。

片岡は、明子の行動や言葉に現れる、眞實味にひかれても、その明子の眞實味が、ほんとうに、微々たるもので二人の間にのみ、通じあうものである事もきづいていた。しかし、片岡は、二人がこれ以上、協力し合つて、互に順應しようとは思わなかつた。

片岡は、自分はまだ前途になんの抱負も持たない学徒だし、明子は完成した、一人の女として世に認められる存在なのであるから、無理に、責任を負わなくとも、とゆう、ずるい考えもなかりなかつた。又、片岡は自分が、明子との結婚をこぼむ氣になつたのは、今まで別個に歩み育つてきた二人が、あらゆる点で一つの型に、はまつて生活するとううことに、無理を感じたし、彼にとつて、そういつた束縛に、たえる氣力がなからであるとも思つた。しかし、こんなことは、みな片岡が、あとになつて考えた理屈なのである。

× × ×
明子は、やはり片岡に會うことにした。

片岡は、あつさり會うことを承知した。聞きなれた聲が、電話を通じてびし／＼と耳に入つて來ると、明子は、心の重荷が、ほんの少し軽くなつたやうな氣がしたが、すぐに、心の中にとび込んでくる、様々の不安で明子は全く混亂しきつていた。

約束の場所に行つた時は、まだ片岡は見えていなかった。明子は、木かげに置かれた、古いベンチに腰を下して、目をつむつた。緊張してないといふ足がふるえて、てん倒しそふであつた。片岡と、こんな結果になつてしまつたことが、とり返しつかないことになつてしまつたやうにも思われた。

昨日會つた、坂田の自信にみちた、あさぐろい顔と、片岡の思いやりのある、まなざしが浮かんでくる。
「あゝ、こんなところだつたのか、あんまり奥の方だつたので氣がつかなかつた。」片岡の聲を、がん／＼耳にたゞきつけられるやうな氣持で聞いていた。

片岡は人眼をさける様子で、松林のつゞく道を撰んだ。「私、結婚することになりました。」明子は、感情を殺していつた。彼女は、自分の言つた言葉に、頭をガーンと横なぐりに、なぐりたおされたやうに感じた。

「うむ、聞いていた。おめでとう。」片岡は、あらゆる二人の感情を無視して、短く答えた。

「私、片岡さんが平氣な顔で、おめでとうをおつしやるなんて——ずい分だと思ひます。」

明子はせつばつた氣持で、片岡に迫つた。

「でも明子さん、今更そんなこといつても、どうにもならないことではありませんか。」

「いゝえ、片岡さん、私、片岡さんの云う様ならどんなことも出來ます。ですから、もう一度はつきりおつしやつて下さい。」

「それでは、このまゝ黙つて結婚なさつて下さい。それが一番よいことですから。」

明子は、何とも云わずに足もとをみつめて、歩いていった。片岡は歩調を合せながら、明子の様子に、あわれみを感じた。そして以前は、その髪の毛の一本一本にまで愛着を感じた自分として、現在の心境を思うと、片岡は自身をもあわれに思つた。

明子は、突然足をとめると、思ひきつたやうに、顔を上げ、片岡に近づいた。

「もう聞きません。もう一度、本当の事を云つて下さい。私は始めから、あなたと結婚する意志がなかつたんです。もう、あなたを愛してはいません——つてそうしたら私はもう、片岡さんをあきらめます。」

「いやです、僕は明子さんが、きらいだなんて、——今だつて、變りありません。何のために、そんな事いわせるんです。」

「ずるい、片岡さん、貴方つて、どこまで、卑怯な方でしょう。」

「僕はいいわな、そんな事うくらゐなら、今日わざ／＼くるのじやなかつたんだ。けんか別れなんて、よそ、もうこれで最後だ。結婚なんて大したことじやない。幸福にやりたまえ。」云ひすてると、片岡は、おこつたやうに、大腿に明子のそばを、離れていつた。

明子は、松林の中に、みえがくれする、片岡の黒つばい秋姿を、ぼんやり見送つていた。彼の姿がすつかり、

松林から消えてしまふと、明子は、始めて氣がついたやうに、砂濱にくずれるやうに、腰を下した。大きな足跡がとび／＼に、遠のいていついていた。

このやうにして、一人とり殘されてみて明子は、片岡をにくむきもちにはなれなかつた。しかし明子の心は、片岡を思ひ思ふ程、激しい、悲しみが、おし寄せて來るのであつた。明子はしばらく落ち着こうとして、海につき出た、岩に登つた。白い波が岩にぶつかつて、散るのを眺めながら、明子は、もう片岡は、永遠に自分のもとに歸つてこないのだと思つた。小さい頃、聞いたおとぎ話の様に、眼をつむつてゐる間に、今の一番の望みをかなえてくれて、波が岩ごと沖へ運んでくれたら、どんなに、せい／＼するだらうと考へたりした。

「坂田は、立派なやつだ。明子も幸せになれるよ。」相好くして喜こんでいた父の顔が浮んできた。秋風が、明子の顔を冷たく吹いてゆく。

「結婚なんて、大したことじやない……。」片岡の眞剣な顔、父母や、自分を前にして、おちついて、自信にみちて、メレジュニフスキーの象徴主義を論じた、坂田の顔が、重なり合つて一つになつた。

明子は離れ／＼になつた、二つの運命を、又しても追う氣持になつていた。

結合——明子は惡感にじつと堪えてゆく氣持で、不可解な結婚に飛びついてゆくとする決心にたどりついた。

次回原稿募集規定

- 一、創作 四百字詰原稿用紙二十枚以内
- 一、詩 五篇以内
- 一、短歌・俳句 制限なし
- 一、隨筆・評論・その他

★必ず原稿用紙を使用のこと

文 學 部

編集後記

◎今年も木犀の匂ふ頃になりました。本校も今年で創立四十周年を迎え、この記念祭の時に当り、私達文學部は「あかる」四十周年記念號を皆様におとどけ致します。

◎校長先生を始め、富澤先生、八木先生、中柴先生の原稿を戴き、誌上をかざることが出来ましたことを編集部一同感謝致して居ります。

『あかる』創立四十週年記念號

(第六號) 非賣品

昭和二十六年十月十八日發行

發行人 磐城女子高等學校文學部

編集人 磐城女子高等學校文學部

平市一丁目七番地

印刷所 渡邊印刷所

紳士 婦人 服地と既製服

◀御注文仕立も致します▶

平 四

株式
株會

鈴 藤

電 話 9 3 番

純毛
純綿

衣 料

各
種

平 東

TEL 1.144

◎ 責任をとる店
◎ 良い品を
安く提供

金 物 は ……

久 釜 屋 へ

電 九・九九・九九九

最高の品質・豊かな色調

ダイヤモンド毛糸特約店

各種縫糸
手縫材料

ハシモトヤ糸店

平市田町銀座通り
電話 十四番

御買物に御散策に御気軽に
御立寄り下さい。
豊富な商品と品質保證とを
第一のサービスとして奉仕
させて頂きます。

三幸デパート

平市三丁目三十一番地
電話五〇六番

婦人服地と純毛糸

オーバ地・スーツ地品揃

エビスヤ洋装店

平市驛前大通リ
電四三八番

最高の設備で……良い映畫を!!!

平驛前

映畫の殿堂

ひかり座

畫面は鮮明美麗!!
音質は快適優美!!



映寫機は最高級の
ニュースター